



# 先生の甘い誘惑



櫻宮まじゅ

## 【出会い】

---

出会いは必然だったのか、偶然だったのか。それはわからないけど、もしかしたら必然だったのかもしれない。

「夏歌ちゃん！今日さ、クレープ食べに行かない？」

学校での1日が無事に終わって、友達の田辺彩ちゃんがスクールバックを抱えて私に駆け寄ってきた。

「うーん……どうしようかな……」

曖昧な返事をしながら、うーんと唸り声を上げた。

私は春川夏歌。現在は高校2年生の17歳。青春真っ只中のお年頃。

「あー、都合悪い？」

「ううん。そうじゃないけど……」

そりゃあ私だって、彩ちゃんと寄り道したい。したいけど……。

「夏歌～」

唐突に私の名前を呼ぶ、大きな声が教室内に響いた。声がした教室の入り口の方を見てみると。

「翔太先輩……」

目が合うと、翔太先輩はニコッと笑って大きく手を振った。対して私は、愛想笑いをして小さく手を振り返した。

「あ、そっか～。彼氏と下校かぁ。いいな、この幸せ者が！」

彩ちゃんはニヤニヤしながら、私のわき腹を肘で突いた。

幸せ者、か。やっぱり傍から見たら、そんな風に見えるんだ。

彩ちゃんに手を振って、カバンを持って翔太先輩に駆け寄った。

「帰ろうか。行こう」

「はい……」

いつものように翔太先輩は私の手を握った。一応、私も握り返した。

彼、相田翔太先輩は、1つ年上の私の彼氏。

頭が良くて、成績優秀な先輩は生徒会長を務め、男女から信頼される人気者。おまけにルックスも良い。サラサラの黒髪。パッチリした目に、綺麗な二重。通った鼻筋に、どこか色っぽい唇。黒縁のメガネをかけてて、それがまた優等生らしさを醸し出して似合ってる。

付き合うようになってから、まだ1ヶ月。

先輩から告白された時は、それはそれは驚いた。

私達の関係はせいぜい、あいさつを交わす程度でまともに話した事がなかった。ましてや、先輩に特別な感情なんて抱いてなかった。

でも、断る理由もなかった。私は決して先輩の事が嫌いなわけじゃない。むしろ尊敬はしてた。だから告白をOKした。

今まで恋とかした事がなかったらから、恋愛がどういうものか私はよくわからない。先輩と付き合えば、恋愛の事がわかるかもしれない。それもOKした理由のうち。

非常に不純で、非常に最低な理由だと自分でも思う。

「今日さ、授業中に……」

帰り道、いつも話題を切り出すのは先輩の方。

先輩の他愛もない話を私は時折相づちを打って聞くだけ。こうして一緒に過ごす時間は、居心地が良くも悪くもない。

付き合って1ヶ月だというのに、いまだに先輩と2人きりになると緊張してしまう。今だって、私は緊張してほとんど話せてない。

「夏歌」

「え……きゃっ……!!」

名前を呼ばれ、先輩の手がスッと私の髪の毛に触れた。咄嗟に変な声が漏れて、ギュッと目をつぶった。

「髪の毛にゴミがついてただけだよ?何かされるって、思っちゃった?」

「……」

たったこれだけの事で過剰に反応する自分が恥ずかしい。

今日も先輩は丁寧に家まで送ってくれた。

「じゃあ、また明日な」

「はい……送ってくれて、ありがとうございます」

家の玄関の前で、ペコッと頭を下げた。

先輩は私の顔をジッと見つめ「夏歌」と小さく呟いた。照れくさくなって私は視線を逸らした。

「夏歌……視線、逸らさないで。真っ直ぐに俺を見てほしいな」

「っ……」

「俺だけ、見てればいいんだよ」

恋愛小説や少女漫画に出てきそうなセリフ。

先輩のファンの子なら、こんな事言われたら「キャー」と絶叫して気絶するだろう。

「それじゃあ……また明日……」

反応に困ったので、また適当に誤魔化した。

急いで、家の中に入ろうとした。そしたら、腕を掴まれた。

「待って。これ、夏歌に……」

先輩は持っていたピンク色のラブリーな可愛らしい紙袋を差し出した。てっきりファンの子からの差し入れなのかと思った。

「店の売れ残り品で悪いんだけど、マカロン。夏歌、これ好きだよな?」

「はい……好き、です」

先輩の家はケーキ屋さん。こうして時折、お店で余ったケーキやマカロン、クッキーを私にく

れる。

「いつも、ありがとうございます」と、頭を下げて、逃げるように家に入った。

家の中に入ると、兄はまだ帰ってきてないようで、静まり返っていた。

私は兄と2人暮らし。両親は小さい頃に事故で亡くなってしまった。兄は10歳年上で、27歳の社会人。唯一の大切な家族。

自分の部屋に行き、ベッドの上に座って早速、先ほどもらったマカロンを一口食べてみた。

「甘い……」

先輩がくれるお菓子は、どれも甘くておいしい。洋菓子は甘いけど、先輩と過ごす時間は決して甘いとは感じない。

マカロンを食べるのをやめて、ベッドに寝転がって、ぼんやりと天井を見つめた。

やっぱり恋愛って、よくわからないや。

「私には向いてないのかも、恋愛なんて……」

この頃は本気でそう思うようになっていた。だけど、そんな私にもうすぐ新たな出会いが訪れようとしていた。

新しい出会いなんてこの時は、夢にも思っていなかった。

それから数日経った日の事だった。

「春川」

放課後、帰り支度をしてると急に担任に名前を呼ばれた。

職員室に來い、と言われたので、私は彩ちゃんに手を振ってカバンを持って職員室に行った。

ちなみに今日は、翔太先輩と一緒に帰れない。生徒会の会議があり、忙しいとの事だ。最低だけど、微妙に安心してる自分がある。

「失礼します」

職員室に行くと、担任から「ん」と茶封筒を渡された。

「お前、こないだの歯科検診休んでただろ?だから、直接病院に行って受けろ。その書類を見せたら、ちゃんとタダで受けれるから」

「えっ……」

あー、そういえばこないだ風邪引いちゃって休んだなあ。

たいした風邪じゃなかったのに、お兄ちゃんが「休め」ってうるさかったから。

歯科検診、嫌だな。できれば受けたくなかったんだけどなあ。ショボンと肩を落とし、「失礼しました」と言って職員室を出た。

家に帰って、茶封筒を自分の部屋の机にしまった。

検診、受けないとダメだよね?

嫌だなあ。すごい憂鬱。

気を紛らわすために、今日出された数学の宿題をする事にした。しばらく宿題をしてると「た

だいまー!夏歌ー!」と賑やかな声と共に部屋のドアが豪快に開いた。

シャーペンを置いて、ノックもなしに部屋に入ってきた人物を呆れた目で見た。

「今日は仕事が終わったから、早く帰れたよー! 兄ちゃんがいなくて寂しかったよな? 寂しい思いさせてごめんよ!! 我が愛しい妹よ!!」

27にもなって落ち着きのない兄は、私を苦しいくらいの力で抱きしめて、頬を摺り寄せてきた。私の兄、春川雅人。この人はものすごい超ド級のシスコンで、過保護の心配症。

「今日はお土産にケーキを買ってきたよ! いつも仕事で遅くなって、本当にごめんなあ」  
でも私、知ってるよ?

本当はすごく仕事が忙しいはずなのに、私のために極力早く帰ってくるようにしてるんでしょ?

シスコンだけど、とっても優しい兄。そんなお兄ちゃんの事が、私はとっても大好きです。

「さっ、ご飯の前にケーキ食べちゃおうよ」

手を引かれリビングに行き、ダイニングテーブルにいつもと同じように向かい合って座った。

お兄ちゃんは鼻歌を歌いながら買ってきたケーキを箱から出してお皿に置いた。

あ、私の好きなイチゴタルトだ!

私はルンルン気分でタルトを一口パクリ。やっぱ最高においしいなあ。

「夏歌の食べてる姿、可愛い……」

「お兄ちゃん、いちいち写真撮らなくていい」

「な、何言ってるんだ。俺は写真を撮るなんて一言も」

「じゃあ何で手にデジカメ持ってるの?」

「……何となく?」

シスコンぶりには、本当に呆れる。

実は彼氏がいる事は、まだお兄ちゃんには言えてなかったりする。何となく怖くて言えない。

タルトを食べて幸せな気分浸ったが、やはり頭の中をチラつくのは歯科検診の事。

痛い歯とか、特にないから大丈夫だとは思うんだけど……。

小学生の時も中学生の時も、歯科検診で虫歯があると指摘された事はある。だけどあいにく、歯医者さんは大嫌い。

先生も治療も、怖くてたまらないから。歯医者に通院とか、もう絶対勘弁だよ。どうか、虫歯がありませんように。

夕飯を食べて、お風呂に入って、自室に戻って早速スマホである事を調べた。

調べるのは、もちろん歯医者さんの事。

どうせ行くならやっぱ評判の良いところがいい。今まで通ってた所は先生も衛生士さんも冷たい感じの人で、痛がっても平気で押さえつけて治療するような所だった。

それがトラウマになって私は歯医者さんが大嫌いになった。

「あ……ここ」

調べて探してるうちに、1件ピンときたところがあった。

家からもわりと近い場所にあり、ネットのレビューを見る限りだと先生がかなり優しくて、どんな歯科恐怖症の人でも必ず最後まで通えるとの事だった。

優しい先生がいるなら……ここに行ってみよう。

私はそう決意して、静かにスマホの電源を切った。

次の日の放課後。

迎えに来てくれた翔太先輩に用事があると頭を下げて、早速昨日ネットで調べた歯医者さんに向かった。

スマホで地図を見ながらゆっくりゆっくり歩いた。にも関わらず、早く着いてしまった。学校からも結構近いみたい。

この中に入っていくには相当な勇気がいるけど、行かなきゃ。

ため息をつきながら「よし」と小さく意気込んでゆっくりドアを開いた。

待合室には誰もいなかった。ガラーンとしてて、不気味なくらい静まり返っていた。恐る恐る中に入って受付のカウンターを覗いてみたが、そこには誰もいない。

歯医者さんって普通は受付の人がいるんじゃないの？

もしかして今日は休みだったとか？

「あのっ、すみません！すみませーん！」

大声で叫んだ。

誰もいないんだったら、このまま帰っちゃうのもアリかな。帰りたい気持ちが先行して、帰ろうと受付を離れようとした。

「は〜い」

その時、奥の方から気の抜けた感じの緩い声が聞こえてきて、バタバタと賑やかな足音がこっちに近づいてきた。

休みじゃなかったんだ。軽く落胆しつつも、目の前に現れた人を見て少し驚いた。

「こ、こんにちはっ……はあ……はあ」

走ったせいなのか、息切れしてる彼はおそらく歯医者さんであろう事は理解できた。白衣着てるから。

ただ、髪の毛の色は茶髪。大きな目で、しかも垂れ目の下がり眉、唇も綺麗な形をしてる。全体的に幼い感じの顔立ちをしていた。

「えっと、ここに来たの初めて……だよな？」

「は、はいっ……！」

「予約はしてるかなあ？」

「してないです……」

やっぱ予約しないとダメだった？

「そっか〜。今日はどうしたのかなあ？痛む歯があるの？」

「いえ……あの、検診」

カバンから取り出した茶封筒を差し出した。

「そっか。なるほど～」と、呟きながら先生はそれを受け取った。

「早速始めようか。診察室へどうぞ～」

「えっ……」

もう始めるの？まだ全然心の準備ができてないのに……。

うなだれながら佇んでると、診察室のドアが開いて、先生が「入って～」と私を誘導した。

## 【診察と恐怖の治療】

---

中に入ると、パーテーションで区切られた診察スペースが3つ並んでいた。ほぼ個室になるようで、他に誰もいなくて静かだった。

「手前の診察スペースにどうぞ」

「は、はいっ……!」

ここってこの人以外には誰もいないの？普通は衛生士さんとかいるんじゃないの？それ以前にここ、いろんな意味で大丈夫なの？

怖い気持ちもあるけど、いろいろと心配する点が多い。ネットのレビューは頼りにならないなあ。

診察台に座って、前掛けのようなエプロンがつけられて「はぁ」と重くため息をついた。

チラッと右横の椅子に座る先生を見つめた。だいぶ若いけど、勤務医の人？院長じゃないよね？

視線に気づいたのか「ん？」と先生が私を見た。恥ずかしくなってすぐ視線を逸らして、指先を見つめたり足をプラプラさせた。

「ねえ、名前、聞いてもいいかな？」

「春川夏歌です」

「夏歌ちゃんね。僕は川瀬智です。よろしくね〜」

「よ、よろしくお願ひします……」

「早速だけど、気になる歯とかあるかな？」

「いえ、ないです……」

「わかった。検診だけだから、ささーっと済ませてしまおうね。椅子、倒していい？」

頷くと、診察台の背もたれがゆっくりと倒され始めた。

ああ、ついにきた！恐怖の瞬間！

完全に体が横になって目に移るのは天井とライト。横でパチン、と。先生が医療用グローブをはめる音がする。

グローブをした手が左頬に添えられて、右横からマスクをした先生が顔を覗きこんできた。

「あーんして〜」

「っ……」

「怖くないよ〜？鏡しか使わないって約束するからね〜」

微笑みながら先生は手に持った、歯科検診で使われるミラーを私に見せた。

その笑顔にホッとして、意を決して口を開いた。

「右上から診ていくからね」

カチャカチャと、ミラーが歯にぶつかる音が微かにした。

いよいよ始まっちゃったな。痛む歯は特にないから、多分大丈夫なはずだけど……。

「えっと、7番斜線で6番がC1、5番から3番まで斜線。2番が……C1。1番から4番まで斜線。5番C1、6番○、7番斜線。左下、7番斜線、6番○、5番斜線、4番C1、3番から5



番まで斜線。6番C.....1、7番斜線。よし、お口閉じていいよ」

意味のわからない記号を独り言のようにいっぱい述べた後、先生は書類にスラスラと何かを書き始めた。

確かCって虫歯があるって意味じゃなかったっけ？

実は乳歯はたくさん虫歯にしたけど、永久歯になってからは治療した歯は2本だけ。虫歯にならないよう歯磨きも時間をかけて丁寧にしてるつもり。

「夏歌ちゃん、虫歯があるね」

呆気なく残酷な宣告をされた。

全然痛みとかなかったし、大丈夫だって思ってたからショックだ。

「全部で5本。どれも小さいからすぐに治るよ」

「5本も.....」

更に絶望的な気持ちになった。おまけに診察台も起こされる事なく倒されたまま。それが余計に不安を煽る。

「夏歌ちゃん、エアーかけてもいいかな？」

「え？エアー？」

「空気だよ。歯にね、シュッと空気をかけたいんだけど.....いいかな？」

「は、い.....」

意味のわからないままに返事をして、口を開くよう促され、口を開いたら左下の奥歯、治療済みの歯にシュッと風がかけられた。

「どう？痛んだり、沁みたりする？」

「い、いえ.....」

それから左上の治療済みの歯にもエアーがかけられ同様の質問をされたが、同じ返答をした。

「レントゲン撮ろうか。こっちへおいで」

背中を軽く押されレントゲン室へと誘導された。

レントゲン写真が撮影されて、再び診察台に戻った。先生は横でモニターに映ったさっき撮影したレントゲンを見つめていた。

診察台に座ってるだけでも落ち着かなくて、チラチラと先生の姿を盗み見た。レントゲンを見つめる眼差しは真剣そのもの。嫌いな歯医者さんにいるのに、胸が少しだけキュン、と音を立てた。

「夏歌ちゃん」

「は、はい!!」

不意に名前を呼ばれて、声が裏返った。

「過去に治療した左下6番と左上の6番、奥から2番目の歯なんだけど.....詰め物の下で虫歯が再発してるね」

思いがけない宣告に大きくショックを受けた。

一度治療した箇所をまた虫歯にした情けなさや恥ずかしさで、穴があったら入りたい気持ち

になった。

そんな私の気持ちを読み取ったのか川瀬先生は穏やかにニコッと微笑んで「夏歌ちゃん」と優しいトーンの声で呟いた。

「虫歯の再発、二次カリエスはよくある事だから。気にする事はないよ。ちゃーんと先生が綺麗に治してあげる。二度と虫歯を再発させないためにも、全力でケアもしてあげるから。何も心配する事はないよ」

フワツとした笑顔を向けられて、またドキッとした。けどそのドキドキはすぐに、無理矢理かき消した。

自分には翔太先輩という彼氏がいるんだから、と言い聞かせた。

「6番はレジンで治してあるけど……歯と詰め物の間に少し隙間があるから、そこから虫歯ができちゃったんだね。多分、虫歯が再発した原因は詰め物の不適合だね。レジンも隙間なく綺麗に詰めないとダメなのに」

ややいじけたように言う姿は小さな子供のようでこんな状況で不謹慎だがつい笑いが零れた。

だがその笑いは、次の先生の言葉であっさり消え去った。

「あ、後ね、前歯の虫歯なんだけど……」

「えっ……前歯……？」

「右側の前から2番目の歯なんだけど、裏側から虫歯に侵されてるね……」

前歯を虫歯にした、というショックはあまりにも大きくて、体が小刻みに震えてジワジワと目に涙が滲んできた。

前歯が虫歯になってるなんて、初めて知った。

朝、歯磨きした時だって沁みたり、痛みとか全然感じなかった。全く気づきもしなかった。

女の子なのに……恥ずかしい……。

「先生……前歯、削られるの……嫌っ……」

「夏歌ちゃん。虫歯はまだと一っつも小さいんだよ？だから削る量はほんの少しで済むよ？」

「……銀歯になっちゃうんですか？」

「ううん。それは絶対はないよ。前歯は必ず白いので治療するから」

先生は私を安心させようとニコニコ穏やかに笑ってる。けど不安は消えないまま。

「……何本、治さないとダメなんですか？」

「二次カリエも入れたら7本だね」

「7本……」

もう少しで二桁じゃん。通院も長引きそうだな。

憂鬱な気持ちになったが、この先生が担当なら大丈夫かなという気持ちもあった。

「夏歌ちゃん、今日はどうするかな？治療する？」

「え……えっと……」

「どれも小さい虫歯だから、早めに治すにこした事はない。けど、今日は進行止めのお薬だけ塗って治療は後日ってのも十分アリだよ。どうする？」

7本という数を考えると、先延ばしにせず早めに治した方がよさそう。

私は「治療してください……」と言った。先生は「無理しなくていいよ」と言ってくれたが、「大丈夫です」とだけ答えた。

「じゃあ今日から治療を開始しようか。あ、学校に提出する書類には虫歯はなかったって事にしておくれ。みんなの前で治療勧告もらうのって嫌でしょ？」

さり気ないその気遣いは、正直ありがたかった。

「まずは右上の6番から治そうかな。あ、前歯の治療を先にした方がいいかな？」

「……できれば前歯の方が」

「了解。裏側から虫歯に侵された部分をちょっとだけ取り除くからね」

私の今までの経験上、歯医者さんが言う「ちょっと」は全然ちょっとじゃないんだけどね。

ゆっくり診察台が倒れて、まな板の上の鯉に。

落ち着かなくて、何気なく横の川瀬先生を見ると、治療の器具の準備をした。

「夏歌ちゃん、これが虫歯を取り除く道具だよ。タービンって言って、少しうるさい音がするあれね」

タービンという器具を私に見せて、丁寧に説明してくれた。

「はい、あーんして～。もし痛かったら、左手あげて教えてね」

歯医者さんの定番のセリフは、所詮は気休めにすぎない。

ギュッと目を閉じて口を開くと、キュイイイ…とタービンの独特の音がした。

けたたましい音を立てて前歯の裏側が削られていく。頭全体に響くような振動と水飛沫。前歯の治療を受けるのは生まれて初めてで、怖くてたまらない。

(っ……もう、早く終わってよ)

手をギュッと握り締めながらそう願った。

キュイイイイ…キュイイイイイイイ…

タービンの音はなかなか鳴り止まない。けどその間先生はこまめに「痛くない？」と声をかけてくれた。

最初のうちは全く痛みはなかったものの、削られる振動の中に微かに違和感を覚え始めた。

キュイイイイイイイイ…キュイイイイイ

(あれ……少し、痛い……?)

振動の中に微かに混じる痛み。

必死に意識を削られてる患部から逸らそうとしたが、その感覚は徐々にハッキリしたものへと変化していった。

「んあっ!!いあいつ…あっ…あぁっ…」

気のせいじゃない! やっぱ痛い!

声を上げたらタービンの音が止まった。

「一旦お口ゆすごうね」

診察台が起こされて、口をゆすぎ終わって先生の方を見るとタービンの先を取り替えていた。それを見て、まだ終わりじゃないんだ、と絶望的な気持ちになった。

「せんせえ……」

「夏歌ちゃん……あのね、前歯は少し歯質が薄いから痛みが出やすく……。虫歯も削ってみたら少し進行してて」

「まだ……削るんですか……？」

「……うん、もう少し。麻酔するのも一種の手だけど、麻酔すると削る量がどうしても増えちゃうから」

前歯は目立つ場所だけに削る量を増やすのは避けたい。現にさっき舌で削った箇所を触ってみたら、ポツカリと大きな穴が空いて悲しかった。

「もう少しだけ……がんばれる？」

「……少しなら」

「痛くて我慢できなくなったら、左手あげて教えて」

診察台が倒されて、また患部が削られ始めた。

キュイイイイイイ……

今度は削り始めてすぐ痛みを感じた。

沁みるような虫歯治療独特の痛みが容赦なく襲い、堪えようとしても声が出てしまう。

「んう……いあいっ……いあっ、あっあんっ」

「夏歌ちゃん、お鼻でゆっくり呼吸してー？」

「やっ……やあっ！いやらっ、やらっ……やらあ」

「うん、治療嫌だねえ。もう少しだけがんばれるかなあ」

キュイイイイ……キュイイイ……

穏やかな顔をして川瀬先生は歯をどんどん削り進める。優しい口調とは裏腹に手を止める様子は一切なく、容赦ない感じだった。

「いはいいはいっ……いはいっ……あっ……んあっあぁっあっ」

「もっと力抜いてー？体が強張ってるから、楽にしてー」

この状況で楽にするとか絶対に無理！それ程に前歯の治療は痛くて耐え難かった。

キュイイイイイイイ…キュイイイイイ…

顔は涙でグチャグチャ。羞恥とか気にする余裕もなく散々声をあげ、泣き喚きながら治療を受けた。

「やらっ!!いやらっ……」

大きな声を上げた時、ようやくタービンがストップして口から器具が抜かれ、診察台がゆっくり起こされた。

私は背もたれにもたれかかったまま、激しい運動をした後みたいにグッタリしていた。

涙で顔は悲惨な事になってるし、少し汗もかいてる。

「夏歌ちゃん」

「きゃっ……!!」

いきなり先生に顔を覗き込まれて、びっくりしてつい悲鳴が。

「よくがんばったね。最後までがんばれて、すーっごく偉いよ」

子供をあやすように言われ、川瀬先生はタオルで涙を丁寧に拭ってくれた。マスクもグローブ

もしてなくて、ホッとした。

「少し神経に近い箇所が虫歯になってたから、痛みが出たんだね。でも後は、削った所に白いレジンってのを詰めたら終わりだよ。はい、お口ゆすいでね」

コップを渡されて口をゆすいで、また背もたれにもたれた。

横で川瀬先生は詰め物の準備をしてて、何気なく舌で削った歯を触ってみた。

かなり大きく削られてるようで、これじゃあ治療した、とまるわかりなのでは、と不安が過った。

「あの、先生」

「ん？どうしたのかな？」

準備してる手を止めて、川瀬先生は私の方に向き直った。

「前歯の裏側、どうなってるか……見たいんですけど」

「見るのは後にしようね」

「今、確認したくて……」

「確認するのは、治療が終わった後、ね？」

「……わかりました」

その後の処置は全く痛みを感じる事なくスムーズに進んだ。

削った箇所にレジンをつけて光を当てて、といった手順であっという間に終了した。

川瀬先生は鏡を出してきて、私に口を開けるよう指示して、口を開くとデンタルミラーが入れられた。鏡にはミラーに映った前歯の裏側が映っており、大きな穴が空いてたはずの箇所はどこを治療したのか全くわからないくらい綺麗になっていた。

「どう？治療したって、ぜんぜんわからないでしょ？」

「は、はいっ!!先生、すごいです！本当にありがとうございます」

「いーえ。これなら歯科検診でも治療したってわからないよ」

軽く笑った先生に、私はまたドキッとした。翔太先輩といる時には感じなかった、緊張とは違う種類のドキドキ。

「今日は本当にお疲れ様でした。あ、そうだ！何かご褒美あげないとね！」

ご褒美って普通は小さい子だけがもらうんじゃないの？私はそういうの、もらう年齢じゃないと思うんですけど……。

「はい。ご褒美」

「……イチゴ飴？」

「もっと気の利いた物をあげたいんだけど、今はそれしかなくて」

「ありがとうございます。イチゴ飴、大好きです」

良い笑顔で渡されたら、受け取らないわけにはいかない。

「でも今は食べちゃダメだよ～？治療して30分くらいは飲食禁止ね」

「はい」

「次回の治療は、3日後の……4時で大丈夫？」

「……はい」

「憂鬱かもしれないけど、なるべく来てね。待ってるから」

治療は痛かったけど、この川瀬先生はかなり優しいと思う。ネットに書いてあったレビューの通り、ここなら最後まで通えるのも納得かな。

「あ、そういえば、ここって、川瀬先生しかいないんですか？」

気になっていた疑問を聞いてみた。

「ううん。僕ともう1人先生がいるよ。今はその先生ね、買出しに出かけてんの。なかなか戻ってこないから、またどこかで寄り道してるんだらうけど。普通は歯医者さんっていったら衛生士さんとかいるもんだけどうちでは雇ってないんだ。必要ないと思って」

つまり2人できりもりしてるって事か。こじんまりした小さな医院だけど、大変そうだな。

疑問の答えが明らかになったところで、もう1つの疑問も思い切って聞いてみる事にした。

「あの、聞いたら失礼かもしれないんですけど……」

「どんな事でも聞いて？何でも答えちゃうから」

「川瀬先生って……何歳、ですか？」

「いきなり年齢聞いちゃうか～。大胆だね、夏歌ちゃん。でも先生、ちーっとも若くないよ？夏歌ちゃんみたいにピチピチじゃないよ」

「でも、かなり若いですよね？」

「ううん。37歳だよ」

「ええっ……!？」

37歳という年齢に衝撃を受けた。つまり、自分より20歳も年上という事になる。

てっきり川瀬先生はまだ20代なのかと思ってたから余計に驚きだ。

「あーあ、37っていったら、もうおっさんだよねえ」

世の中不思議だ、と心の中で思った。衝撃を受けながらも「ありがとうございました」と頭を下げて診察台を下りた。

会計を済ませて、川瀬先生は外まで見送ってくれて「またねー」と大きく手を振ってくれた。

次の日になっても、川瀬先生の事が頭から離れてくれなかった。

落ち着いてるのは大人の男性だから。優しいのは私が患者さんだから。きっと誰にでも優しく、ニコニコしてるんだ。

わかっているのに、そう思うと何故か胸の奥が少し切なくて苦しくなる気がした。

「夏歌ちゃん!!」

「おわっ!!」

自分の席でぼんやり頬杖をついてたら、背後から彩ちゃんがタックルしてきた。

「なーにぼんやりしちゃってんの？悩み事？聞きましょうか？」

「えっと……」

自分より20歳も年上の男性の事ばかり考えちゃってます、なんていくら親友が相手でも言えない。だからここは遠回しに話してみた。

「あのさ、彩ちゃん……これは友達の話なんだけどね、自分より20歳も年上の人にドキッとしちゃったんだって」

「はあ!!??」

案の定、彩ちゃんは怪訝そうな顔をした。

「ちょっと待って!!その友達って何歳？」

「17……」

「うちらと同じ年？じゃあ20歳年上っていったら、37じゃん!!うわー、絶対にないない!!死んでもありえないよ!!そんなおっさんと恋愛なんて絶対に嫌だよ」

返ってきたのは思った以上にきつい言葉。

「20歳の年の差恋愛はないわ～。ある意味、援助交際じゃない？てゆーか、うちらまだ若いんだから、どうせ恋愛するならやっぱ同年代のカッコイイ人じゃないとね」

その後も彩ちゃんは「彼氏欲しい」とかいろいろ言っていたけど、ちっとも頭に入ってこなかった。

20歳も年の差があったら、援助交際って思われちゃうのかな？そう思った瞬間、なんだか悲しくなった。

川瀬先生にドキドキした私はおかしいんだ。

この時はそう思っていたが、川瀬先生との出会いが、これからいろいろな事を変化させていくキッカケとなったのを、私は知らない。

## 【通院は憂鬱だけど】

---

あれから3日後。

「夏歌、帰ろう」

放課後、いつものように翔太先輩が迎えに来た。彩ちゃんは「ダーリンが来たよ〜」ってニヤニヤしてる。

彩ちゃんに手を振って、カバンを抱えて翔太先輩の方へ駆け寄った。

「今日さ、俺の家来ない？」

「え？」

「父さんは仕事、母さんも友達と出かけて遅くまで帰ってこないと思うから、どうする？新作のおいしいケーキもあるし」

教室のドアの入り口で、周囲に人がたくさんいるにも関わらず先輩は私の腰に腕をまわして、抱き寄せてきた。

「あっ、あの先輩っ……」

いきなり迫られるみたいな形になって、戸惑って、両手で先輩の胸板を押した。が、私の抵抗はなんの効果もなかった。

翔太先輩の事だから、下心があるわけじゃなくて、ただ純粹に誘ってくれてるだけだろうとわかっているけど、ついつい警戒してしまう。

でも今日は既に先約が入ってるから、どのみち無理だ。

「先輩、今日は用事があるので無理です。ごめんなさい」

「……用事って何？」

眉を寄せて、明らかに不機嫌になった先輩に困惑しつつ、どうにか腰にまわされてる腕を解いて、走ってその場を逃げた。

今の先輩には何を言っても言い訳としか受け取ってもらえなさそうだと感じたから、答えなかった。

走って学校を出て、しばらく歩いて到着したのは3前に来た歯医者さん。

今日は治療の日だ。

ドアを開くと、独特の匂いが鼻を刺激した。

「こんにちは……」

相変わらず誰もいない待合室。

今日も静かだな、と思っていると……。

「こんにちはー！」

突然、元気の良い返事がしたのでビックリした。

受付のカウンターを見ると、そこにはチャラチャラした感じの男の人がいた。髪の毛は明るい茶髪。おまけに耳には小さなピアス。明らかに医者らしくない風貌。

でも顔はなかなかカッコイイ。おまけにスタイルも良くて、まるで芸能人みたいだ。



「あの、私」

「夏歌ちゃんでしょ？智から話は聞いてるよ。まずは保険証出してね」

保険証を渡して、お兄さんはニコッと笑って、馴れ馴れしく私の頭を撫でた。

「っ……」

「夏歌ちゃん、可愛いねー。いかにも純粹そうな子だねー」

この人は見た目の通り、チャライ人に間違いないみたいだ。

「俺、桜川悠。ここに勤務してる先生なんだ。よろしくね」

この人が、川瀬先生の言ったたもう1人の先生!?

白衣着てなかったら、絶対に医者だってわからないな。

「なーに楽しそうに話してるのかなぁ」

「あっ……」

桜川先生と話していると、奥からひょこっと川瀬先生が顔を覗かせた。

「こんにちは、夏歌ちゃん。サボらずにちゃんと来れて偉いね」

「い、いえ……サボるわけないですよ」

前回の治療が痛かった事もあって、確かに今日ここに来るのが少々憂鬱な気もしたが、川瀬先生に会うのがちょっと楽しみに感じてたのも事実。

「こいつさ、めっちゃ心配してたんだよ？夏歌ちゃん来るかなって。何度も俺に聞いてきてさぁ。まるで恋する乙女のように、ちょっと気持ち悪かった」

「ちょ、悠くん!？」

「いいじゃん。本当の事なんだから」

「夏歌ちゃん、この人は放っておいて診察室に入ろうか」

「はい」

「あ、ちなみに夏歌ちゃん！俺、27歳だから！ピチピチのお兄さんだから、今が狙い時だよ！」

桜川先生に意味不明な事を言われたが、とりあえず苦笑いして診察室に入った。

「夏歌ちゃん、悠くんには気を付けてね」

診察室に入ってすぐ、川瀬先生は少し顔を近づけてきて、耳元でそう言った。

距離が、めちゃくちゃ近い……。

「あの人、見た目は文句なしのイケメンなのに性格がチャライから～。すぐ女の子をナンパしちゃうんだ。全く困ったもんだよ」

へーえ、見た目通りの人なんだ。

「あ、今日は1番奥のどうぞ～」

さり気なく先生の手が背中に触れる。たったそれだけで胸が高鳴った。

やっぱ私、おかしい。

先生に対しては、ちょっとした事でドキドキする。

緊張とドキドキが入り混じる中、診察台に座って、エプロンがかけられ、先生は右横の椅子に座って早速本題に入った。

「夏歌ちゃん、今日は二次カリになってる箇所、左下の奥から2番目の歯を治したいなって思ってるんだけど……」

「い、痛いんですか？」

恐怖心のせいか、声が震えた。

「痛みは、出るよ。元々、ある程度削ってある歯を更に削るわけだから、麻酔をしても痛みは出てしまうと思う」

痛い、と言われて、先生から視線を逸らした。

じわじわと手に汗が滲み始めてきた。痛いとわかってる治療を受けるのは、実に勇気がいる行為だと思う。

「ごめんね。痛い、なんてハッキリ言われたら、普通に考えて嫌だって思うよね。でも、痛くなるのは事実だから、僕は嘘で「痛くない」って言うのは嫌なんだ。もちろん、止めてほしい時は左手あげてくれればいいし、嫌がるのを押さえつけて無理矢理治療したりも絶対しないからね」

優しいトーンの声と口調に、自然と治療に対する恐怖心が少し和らいでいった。同時に「大丈夫、この先生ならきっと、大丈夫」と、わずかに自信が湧いてきた。

「夏歌ちゃん、今日はやっぱり違う箇所を治そうか」

「いえ……先生が、最初に言ってた箇所を、治して、ください」

俯ながらそう言うと、先生は「わかった」と言った後、いきなり両手で私の顔を包み込んで、グイッと上に向けさせた。

「っ……」

「がんばってくれるのはと一っつても嬉しいけど、全然こっちを見てくれないのは、ちょっと寂しいな」

ニコッと笑って、先生はあっさり手を放して、何もなかったみたいに治療の準備にとりかかった。

一方の私は軽く放心状態。

急にあんな事するから、ドキドキし過ぎて心臓が壊れそう……。

「さ、始めようか」

準備を終えた先生が私に向き直り、「倒すね」と前置きされたうえでゆっくり診察台が倒された。頭上のライトが点けられ、口元が明るく照らされた。

それだけでも十分緊張感を煽るが、いつの間にかマスクをつけた先生が上から顔を覗き込んできた途端、緊張がピークに達した。

顔がほとんど見えないって、やっぱり少し怖いかも。

「夏歌ちゃん、どうする？麻酔、する？」

「っ……嫌っ！麻酔は嫌っ！ヤダ」

子供みたいに、口元を手で覆って首を振って嫌がった。

歯医者さんでの麻酔注射は一度だけした事があるが、酷く痛かったのを今でも覚えている。

拒否する私を、先生は呆れる風でもなく、ただ優しく「了解です～」と言って微笑むだけだった。

「まずはお口の中を見せてもらうね。あーんして」

目を閉じて、ゆっくり口を開いた。

口の中に入ってきたミラーは少しひんやりして、薬品の匂いがした。一通り、口の中を見た後、診察台が起こされた。

「ねえ、夏歌ちゃん、奥歯の方にだいぶ磨き残しがあるんだけど、ちゃんと奥まで丁寧に磨いてる？」

「えっ……」

思ってもない事を指摘され、戸惑った。

しかも、かなり恥ずかしい指摘。

「歯磨きの仕方も、後でしっかり指導した方がよさそうだね」

この人は歯医者さんだから、こういう指摘をするのも仕事のうち。

それは十分わかっているけど、こういう指摘をされるのは、実に恥ずかしくて、実にいたたまれない。ましてや、少し気になってる相手に……。

(……私、何考えてんだろ。翔太先輩がいるのに、他の人の事が気になるとか……かなり最低)

「じゃあ今日は、左下の歯を治そうね。レントゲンで確認した限り、少し大きめの虫歯ができてるみたいだから、ちょっとだけ一緒にがんばろうな」

「あっ、はい」

そうだ、今はこれから痛い治療を受けないといけないんだ。

再び、まな板の上の鯉状態になり、先生はタービンを持って覗き込んできた。

こころなしか、タービンの先がこないだのよりも、太くて、鋭く尖っている気がした。

「痛かったら、左手あげてね。はい、あーんして～」

固く目を閉じて、恐々口を開いた。

キュイイイイイ……

耳障りな、嫌な音が響き渡る。タービンが左下の奥歯に触れた途端、この間みたいに顔全体に振動が響いた。

キュイイイイイイ……キュイイイイイ……

自分の口の中からする、けたたましい音、大きな振動に水しぶき。

痛くはなくても恐怖心を煽るには、十分の要素だった。

「んう……んっ、ん～」

「あ、痛い？」

喉の奥から漏れた情けない声を、先生は聞き逃さなかった。

わざわざ手を止めて、心配そうに聞いてきた。

「い、いえ……」

微かに首を振りながら答えると、先生は安心したように「そっか」と言い、再び歯を削り始めた。

キュイイイイイイイイ……キュイイイイイイイイ……

こないだよりも削る時間が長い気がして、不安になって閉じていた目を少し開くと、すぐ目の

前には覆いかぶさるようにして真剣に口の中を覗き込む先生の顔があった。

歯の治療って、こんなに顔を覗き込まないとダメなんだ。

しばらくして徐々に、振動の中に痛みが混じり始めた気がした。

なるべく痛くないと思い込むように努力してみたが、痛みは強さを増していく。手をあげようかと迷ったが、もうすぐ終わるかも、と期待を込めて、ギュッと手を握り締めて耐えた。

願いが通じたのか、うるさく鳴り響いていたタービンの音が止まった。

よかった、終わったんだ。

診察台が起こされ、口をゆすぐよう促された。

痛かったけど、なんとか耐えられた。むしろこないだの治療よりマシだったかも。安堵しながら口をゆすいで、先生の方を見た。

目が合うと、先生は「まだ痛みはないかな？」と聞いてきた。

「えっ、終わりじゃないんですか……？」

困惑しながら聞き返すと、

「まだ虫歯の部分を、半分も取りきれてないなあ」

衝撃的な言葉が返ってきた。

「どうする？やっぱり麻酔する？」

「麻酔は嫌ですっ……」

「じゃあこのまま麻酔なしで、がんばってみようか。倒すね」

また倒されて、促されるままに口を開いて、歯が削られ始めた。

怖い怖いという気持ちや、嫌だという気持ちがプラスされたせいか、今度はさっきよりも強い痛みを感じた。

「いっ、はっ……いはっ、いはいっ……！」

堪えようにも、痛みは耐えがたく、ついに声が漏れた。

「夏歌ちゃん……まだ、ちょっとがんばって……」

「やっ……やらっ！やらっ……んっ、ああっ……」

無意識のうちに、足を少しばたつかせたり、体がもぞもぞ動いてしまう。それでもタービンの音は鳴りやむ事なく、容赦なく歯を削り続けていく。

「危ないからお顔は動かさないでねー。ほら、お口ももう少し大きくあーんしてー」

「あああっ……いあっ！んああっ！」

「もう少しだけがんばってー。ちょっと力を抜いて、楽にしてね」

小さな子供に接してるかのような口調。言い方は優しいが、手を止める様子はない。

子供のように、治療の痛み泣き喚きながら、すがるように左手をあげた。

しかし、先生は気づいていない。どうしても止めてほしくて、タービンを持つ先生の手を振り払おうとした時だった。

「ちょ、智っ！早く止めてあげなって！左手あげてるじゃん！」

天の助けが現れた。

桜川先生の言葉に、川瀬先生は慌ててタービンを止めた。

「ごっ、ごめんっ、夏歌ちゃんっ！気づけなくて……本当、ごめん」

マスクを顎にずらして、申し訳なさそうに謝って、タオルで涙を拭ってくれた。

「まーったく。夏歌ちゃんの泣き喚く声が聞こえてきて、タービンの音が全く鳴り止む気配が全然なかったから、心配になって様子を見にきてみれば……」

かぁーっと、全身が熱くなっていくのを感じた。

私の声、桜川先生のところにまで聞こえたんだ……。

「智ってば罪な男だねー！こーんな可愛い女の子を泣かせるなんて」

「反省してます……」

「さ、夏歌ちゃんっ！こんなおっさん放っておいて、俺の胸に飛び込んでおいで」

満面の笑顔で、両手を広げる桜川先生にただただ困惑した。

この人は、気さくな良い人なんだろうけど、チャラいのが最大の欠点だ。

「悠くん、夏歌ちゃんが困ってるから、やめなさい。それより暇なら、直麻の用意をお願い」

「はっ？本気で言ってんの？それ」

「いいから、早く用意して。それと、ファイルも用意して」

「ほーい……」

桜川先生は何かを用意しに行ってしまった。

何？ちょくまに、ファイル？

聞きなれない言葉を耳にして、不安はより一層高まった。

「あの、先生……」

自力で体を起こし、縫りつくように、先生の白衣の裾を掴んだ。その手を、先生は両手で優しく包み込んだ。

「夏歌ちゃん、よく聞いてね。虫歯が思ったよりも大きくて、神経を取る治療をしないとダメなんだ」

神経を取る？

どんな治療か、見当もつかなくて、ただ恐怖心だけが煽られた。

「歯には、歯髓っていう神経があって、そこをファイルっていう専用の器具で削って取って、消毒する治療の事だよ。一般的には、抜髓っていうんだよ」

「ばつ、ずい……」

素人の私にはチンプンカンプンな話だが、1つ確かなのは、とても複雑そうで痛そうな治療という事だけだった。

## 【期待は淡く】

---

不安な気持ちを察するかのよう、先生は私の頭を撫でて、柔らかく笑った。

「治療内容だけ聞くと、すごく痛そうで怖く感じちゃうだろうけどね、この治療は麻酔さえが  
んばったら、後はぜーんぜん痛くないんだよ」

「……嘘」

先生には悪いが、とても信じられない。歯を削る作業ですら地獄の苦しみなんだから、神経を  
取る作業はもっと痛いに決まってる。

「そんな治療……受けたくない、ヤダ……」

治療が嫌で、つい敬語を使わず、子供みたいな言葉遣いになってしまった。

「うーん……僕もできれば、怖い思いはさせたくないけど……今、ここで治しておかないと」

「だ、だって……この歯、痛いわけじゃなかったのに……」

「二次カリエスは自覚症状のない場合が多いからね。ここで治療を中断しても、虫歯は治らずに  
進行して、最悪の場合は歯を抜かないといけなくなるかもしれないんだよ？抜髄は麻酔さえ乗  
り切っしまえば後は楽だから……」

私は先生の言葉を最後まで聞かず「嫌っ」と、首を横に振った。子供みたいに反抗的な態度の  
私に先生は怒る事なく、少し困った表情をしながらも宥めようとしてくる。

そこへ、器具の準備をしていた桜川先生は戻ってきた。

「ちょいと智〜。夏歌ちゃん泣かすなよー？ほんっとに罪な男なんだからー」

大袈裟に言いながら、カチャッと微かな音を立ててトレイに何かを置いた。

「この人の言葉、信用できないのも無理ないけど、でも神経取るのは、麻酔を乗り切ったら後は  
もう全然たいした事ないから！ねっ！」

桜川先生も瀬川先生と同じような事言ってる……。

2人の先生にそこまで言われると、さすがにヤダヤダ言ってもらえない。

「ほ、本当に痛くない、ですか……？」

「疑り深いなあ。大丈夫だって！お兄さんが保証するからっ！ま、もし麻酔しても痛かったら、  
智に何でも好きな物買ってもらいな」

一応、「はい、そうします……」と同意しておいた。

「んじゃ、俺は受付にいるから。夏歌ちゃん、智に嫌な事されたら、迷わずに俺の胸に飛び込ん  
できてね」

パチン、とウィンクして、桜川先生は受付へと戻って行ってしまった。

「治療、再開しても大丈夫そうかな？」

「本当の本当に、麻酔したら痛くないんですよね？」

「本当だってばー。そんなに疑わないでよ〜、なんか悲しいなあ」

不謹慎とわかっていながら、しょぼんと露骨に落ち込む先生を子犬みたいで可愛いと思った。

「先生そこまで言うなら、信じます」

そう言ったら、今度はパッと明るい表情に。

「ありがと〜。後で、とびきりのご褒美あげなくちゃね」

「えっ」

とびきりのご褒美って何？こないだみたいに飽かな？

ご褒美が何なのか考えてるうちに、体は寝かされ、治療は再開された。

「まずは麻酔をするね。少し、がんばってな」

大丈夫、大丈夫。麻酔注射なんてほんの一瞬、痛いのは一瞬なんだから。自分を鼓舞して、「あーんして」と言われ、素直に口を開いた。

「一瞬、痛むよ」

先生がそう言い終えた後、口の中に激痛が走った。

「んあああっ!!」

「夏歌ちゃん、これでもう痛い事はないよー？もうすぐ麻酔終わるからね」

そうだった、神経は痛みを感じる部分だった。そんなところに注射打ったら、痛くて当然だ。まさにトラウマになるような痛み。こんなに痛い思い、もう絶対にしたくない。

想像を上回るあまりの痛みには麻酔の後は、しばらく放心状態だった。先生は「よしよし」と、また頭を撫でてくれた。

「さて、もう効いてきた頃だから、再開しても」

「もう嫌っ！あんな痛いのっ……」

口を手で覆って、ついムキになって拒否。

本当にもう、いい年して、なんて手のかかる患者さんなんだろう。

「もう痛い事しないって、約束するから。ほら」

小指を目の前に差し出してきた。

これは、指切りって事？

先生の指にゆっくり、恐る恐る、自分の指を絡めた。

「指切りもしたし、これでもう安心だよな？残りの作業、早く終わらせちゃおうか」

先生の思考回路って、結構単純なのかも。

再び歯が削られ、ファイルというマチ針みたいな怖そうな器具が歯に入れられ、神経が取られたが、その作業は全く痛くなかった。

歯の奥をゴソゴソされてる感じは少し怖かったけど、最後まで痛む事なく、神経を取った後は強烈な匂いの薬が詰められて終わった。

「お疲れ様〜。今日も本当によ〜くがんばったね〜」

今日は先生に情けないところ、いっぱい見せちゃったな。治療が終わった後で、酷く後悔した。

「ついでに歯磨きの指導もやろうかなって思ってたんだけど、疲れたよね？今日はここで終わりにしようか。早く帰って、ゆっくり休んだ方がいいね」

「はい……ありがとうございました」

疲れたのは、先生もでしょ？

先生の額に少しだけ汗が滲んでいたのが、確かに見えた。

「今日のごめんね。痛い思いや怖い思いをさせて。しかも僕、ちょっと脅すような事も言っちゃったし……」

「いえっ！私の方こそ、ごめんなさいっ！先生の事、いっぱい困らせて」

俯き加減になる私を先生は「こっち見て」と耳元で囁いた。少しのくすぐったさに、ビクンとした後、ゆっくり先生の方に視線を戻した。

「そんな辛気くさい事言わないで～。泣かせちゃったのは、こっちなんだから。あ、そうだ！ご褒美、あげなくちゃ」

そうだった！ご褒美って、何くれるつもりなんだろう。

プレゼントをもらう子供みたいに、ワクワクとつい胸を躍らせた。

「たくさんがんばったから、飴ってわけにもいかないし……うーん、どうしょ」

「……先生、ご褒美を何にするか、考えてなかったんですか？」

私の問いに、先生は「うん」とにこやかに頷いた。

ま、こんな事だろうと薄々思ってたけど。

「夏歌ちゃん、ご褒美何がいい？何でも欲しい物、言ってごらん」

「ええっ！」

私が自分で決めるの？

でもこの場合は私が決めるよりも、先生に決めてもらう方がいいな。

「ご褒美は先生にお任せします」

先生が考えた物をもらう方が断然いい。だって私、先生からだったら何をもらっても嬉しいもん。

「お任せしますって言われても……うーん、どうしょ」

しばらく「うーん」と唸って考え込んだ後。

「夏歌ちゃん！」

「は、はい!？」

力強く名前を呼ばれ、つい身構えた。

「連絡先、交換しよっ！」

「……へ？」

「連絡先交換がご褒美じゃ……ダメ、かな？」

「いえ！ダメじゃないです！」

先生は「よかった」と笑い、白衣のポケットから携帯を出した。こんなに素敵なお褒美、もらっちゃっていいのかな？

「あれ、先生ってまだガラケーなんですね」

「えっと、が、がら、がらけーって何？」

「その二つ折り式の携帯、ガラケーっていうんです。私はスマホです」

私もポケットから携帯を出して見せた。

「へ～え、これが噂のスマホかぁ。よくこんなの使いこなせるね～」

この人、機械関係に疎いのかな？スマホを物珍し気に見つめる姿は、例えるなら新しいおもちゃ



やを与えられた子供のように見えた。

今度、少しだけ先生にスマホでゲームさせてあげようかな。

連絡先を交換して、私は少し舞い上がっていた。

こうやって携帯の番号を交換したって事は、少しは私に興味を持ってくれてるって事かな？

彼氏がいるくせに、都合のいい解釈をして、馬鹿な期待を抱いた。

「もし急に歯が痛くなったりしたら、夜中でも遠慮なく連絡してね」

この言葉で落胆。抱いた期待は無残に砕け散っていく。番号を交換したのは好意からではなく、あくまで歯のためなんだ。

翔太先輩の時は、こんな風に些細な事で一喜一憂する事ってあったかな？

「ところで、聞いてもいいかなあ？」

考え事をしてる最中にそう言われ、慌てて「どうぞですっ！」と不自然な日本語を返した。

「夏歌ちゃんって……彼氏いるの？」

「……！」

「やっぱ……いる？」

意図のわからない質問に困惑して、言葉に詰まった。

先生の表情はあまり穏やかではない気がする。真剣な表情にも見えるけど、不安そうにも見える。質問の意図が読めない。

「えっと、私は……彼氏、いません」

戸惑いと混乱で頭が整理できなくて、最低な嘘を言ってしまった。何で嘘を言ったのか、自分でもわからない。ただ、彼氏がいる事を先生には知られたくなかった。

「そっか、いないんだ。そっかあ……フリーか」

独り言のように呟いた後、先生はニコッと笑って「次の治療も3日後でいい？」と言われたので頷いて、診察室を出た。

会計をする時、桜川先生に「あいつに変な事されなかった？」とすごく心配された。もちろん「何もされてません」と言っておいた。

「じゃあ、お大事にね」

「はい。ありがとうございました」

先生に見送られて、医院を後にした。

すぐに携帯を出して、新たに加わった先生の連絡先を見つめながら、つい頬を緩ませた。

「智！一体どういうつもり!?連絡先交換して、おまけに彼氏いるの?とまで聞いて……からかうにも程があるだろっ!つーか抜け駆けズルい」

「……聞いてたの？」

「暇だから、盗み聞きしただけだ。悪く思うな」

「悪く思うよ」

「で、どういうつもり?夏歌ちゃんをナンパしてるつもりなの?あの子、可愛いもんね」

「ナンパじゃない。からかってるわけでもないし」

「だったら何で……」

「さあ、どうしてでしょうね」

「まさか……惚れたとか？言っとくけど、あの子は17だよ？37のお前が手を出したらヤバい  
だろ。ま、俺が手を出すのは問題ないだろうけど」

「……たった、20歳の差じゃん」

「考えてみる。夏歌ちゃんが生まれた年、お前はもう成人してんだぞ」

「うん。そうだね」

「いい年したおっさんが女子高生たぶらかすのはダメだろ」

「相手が女子高生でも、いいじゃん」

「お前、ロリコンだったのか？」

「……さあね」

私が帰った後、医院では、川瀬先生と桜川先生の間でこんな会話が交わされていた。

もちろん2人がこんな会話をしていた事を、私は知る由もなく、予約の日を治療に対する憂鬱な  
気持ちが混ざりながらも、先生に会える嬉しさで胸を躍らせていた。

## 【変化していく形】

---

「じゃあ、行ってくるね。お兄ちゃん」

「行ってらっしゃい。気を付けてね」

翌日の朝、家を出ると、

「夏歌」

「あっ……」

家の前に翔太先輩がいた。

実は私達、一緒に帰れる時は一緒に下校してるものの、登校は別々。理由は単に、先輩は生徒会の仕事で早く登校しなきゃいけない事が多々あるから。

「今日、生徒会は……」

「今日は朝早く登校する必要がないから。それより、夏歌に聞きたい事があるから。歩きながら、じっくり話そうか」

先輩、笑顔だけど怖い。

心ではそう思ったものの、差し出された手を握った。こころなしか、手を握る力がいつもより強い気がする。

「昨日、用事って何だったの？」

「ちょっと、家の都合で……」

虫歯がいっぱいあって歯医者さんに通う事になった、とは恥ずかしくて言えない。先輩は「ふーん」と言って、明らかに納得してないようだった。

学校が近づいてきた時、先輩がいきなり足を止めた。

「どうしたんですか？」

「……夏歌」

繋いでいた手が離され、先輩の両腕は私の腰に回され、抱き寄せられた。その瞬間、先輩は無言のまま顔を近づけてきた。

これは、キスされる。直感でそう感じ、

「嫌っ……!!!」

右手の平で先輩の頬を叩いてしまった。パチン、と濁いた音がして我に返った時、目の前にいる先輩は頬を抑えて啞然としていた。

「ご、ごめんなさいっ！」

逃げるように、走ってその場を離れた。

先輩には失礼だけど、咄嗟に「嫌だ」って気持ちが抑えられなかった。

『夏歌ちゃんって……彼氏いるの?』

ふいに頭の中で鮮明に再生されるのは、昨日先生に言われた言葉。彼氏がないって嘘ついちゃったけど、先生はどうなの?先生は彼女いるの?好きな人いるの?

昨日、聞けばよかったな。でも、もし仮に彼女とかがいたら、ショックだな。私はまた無意識のうちに先生の事を考えていた。

キスされそうになってから、私は翔太先輩を避けるようになった。

休憩時間はなるべく教室にいないようにして、お昼休みは彩ちゃんと人気のない場所で過ごし、放課後になったらすぐに帰宅。

彩ちゃんは私と先輩が喧嘩したと思ったらしく「早く仲直りしちゃいなよ～」と明るく言っていた。

喧嘩はしてないが、今はただ なんとなく会いたくない だけなんだ。

そして歯医者さんに行く前日の夜。お兄ちゃんと一緒に夕飯を食べてたら携帯にメールがきた。

「夏歌、ご飯中にスマホ見ないの」

「んー」

お兄ちゃんの言う事を話半分に聞いて、差出人も確認せずメールを開いてみると、

【あした、まってる】

絵文字も何もないシンプルなひらがなのメール。

案の定、差出人は川瀬先生だった。先生からの、初メール。しかも明らかに携帯の操作に慣れてませんって感じがする。

「可愛い……」

「え、何が可愛いなの？」

気分が高まって、なんて返信しようかなーって考えてると、また1通メールがきた。差出人は……翔太先輩。

ドクンと心臓が嫌な音を立てて、恐る恐るメールを開いてみると、【明日、デートしよ】と唐突なお誘いの文章。私は慌てて携帯を置いて、再び夕飯を食べ始めた。

「メールの相手、もしかして男か？」

「なっ、何言ってるのお兄ちゃん！そんなわけがっ」

「夏歌に男女交際はまだ早い！だってまだ17歳なんだから」

翔太先輩とお付き合いしてる事はお兄ちゃんには報告してない。理由は特にないけど、言い出せないままにいる。

翌日も私は1日中、翔太先輩を避け続けた。

そして放課後、歯医者さんを訪れた私を迎えてくれたのは川瀬先生の柔らかい笑顔だった。

「いらっしゃい、待ってたよ」

「こ、こんにちは」

診察室の方から、タービンの音が聞こえてきた。桜川先生は今、診察中みたいだ。

今日も痛かったら嫌だな。先生の顔が見れるのは嬉しいけど。

診察室に入って診察台に座り、エプロンをかけられて、ひとまず先生は世間話に入った。

「昨日、メールしたのに……返事、なかった」

「あっ！」

そうだった。結局、返事してないままだった。

「ごめんなさいっ！ちょっと、バタバタしてて」

「別に気にしてないけど、でも……返事、ほしかった」

拗ねる先生が妙に可愛く見えた。

更にメールの文面がひらがなだった事を指摘すると、恥ずかしそうに「メール打つの苦手なんだよ～」と落ち込み気味に言った。

「本当に機械音痴なんですねー」

「あ、夏歌ちゃん、僕の事馬鹿にした～。もう、大人をからかっちゃダメ」

先生が優しく右手で私の頬をつまんだ。さり気ないスキンシップに、また心臓はドキドキと騒がしくなる。

もう、ダメなのに。私には翔太先輩がいるんだから。他の男性にドキドキなんて、絶対しちゃダメ。

「そろそろ、本題の方に入ろうか」

私が葛藤してる間に先生はスイッチを切り替え、診察モードになった。

「今日は前回、神経を取った箇所の消毒と虫歯を1本治そうか。小さい虫歯を治療しようと思うから、今日は何にも痛い事ないからね」

説明を受け、疑問が浮かんだ。

「神経の治療って、何回もかかるんですか？」

「うん。何回か消毒をして、その後は型を取って被せる事になるから、ある程度の時間を要するね」

神経の治療って複雑なんだなあ。

消毒する作業はゴソゴソされてる不快感が少しあったけど、全く痛みはなかった。その後は「左下の4番の歯を治す」と告げられた。

先生は笑顔で痛くないと豪語していたが、前回と前々回で歯を削る際にもものすごく痛い目に遭ったので、すっかり歯を削られる事に恐怖心を覚えていた私は、タービンの音がして早々に「痛い痛い」と言って喚いた。

それでも先生は怒らずに「怖くない怖くない」と言って、辛抱強く私を宥めて落ち着かせてくれた。怖かったものの、無事に治療が受けられ、痛みを感じる事ないままこの日の治療は終了した。

次の診察日は土曜日の2時。いつも学校の帰りに通っていたので、休みの日に通うのは初めて

。

何を着て行こうかな？

「ねえお兄ちゃん、このピンクのワンピースとこっちの紺色のロングスカート、どっちがいいと思う？」

予約した土曜日の前日の夜。リビングのソファで、コーヒーを飲みながらくつろぐお兄ちゃんに厳選した2着の服を見せながら尋ねた。

「ピンクのワンピースがいいんじゃない？それ、夏歌のお気に入りでしょ？」

「じゃあこれにしよう！」

「でもそのワンピース、丈が……」

「可愛って、言ってくれるかなあ……いや、さすがにそれはないか」

早く明日にならないかな。

失礼だけど翔太先輩とのデートの時は、こんなにワクワクしなかった。むしろ緊張ばかりして落ち着かない。デートした回数はまだ片手で数えられるくらい。

「夏歌、楽しそうだね。まさかデート？」

「ちっ、違うよ！それはないよっ！」

お兄ちゃんは目を細めながら「ふーん」と呟き、疑いの眼差しを送り続けていた。

これはデートなんかじゃないもん。

ワンピースとスカートを胸に抱えながら、軽く唇を噛みしめた。

翌日。

医院に行くと、早々に診察室からタービンの音がしていた。

受付のカウンターには誰もいなくて、置いてあるベルを鳴らしたらバタバタと騒々しい足音が聞こえてきた。

「いらっしゃい！夏歌ちゃんっ！」

走って来たのは、今日も相変わらずチャライ桜川先生。

「わわっ！今日は私服じゃん！そーいや私服姿、見るの初めてだねー！」

カウンターから少し身を乗り出して、桜川先生は興味津々といったように私を見つめた。桜川先生に見てもらうためにこれを着たわけじゃないのに。

「めっちゃ似合うね。淡いピンクのワンピース！しかも、良い感じに丈も短いし！あー、ヤバイ。なんか襲いたくなってきちゃった」

「え……やっ！」

桜川先生はニヤッと怪しく笑って、私の右肩を掴んできた。

その次の瞬間、パシッと大きな音がした。

「いってえ……」

「悠くん、なーにやってんのかなあ？」

「川瀬先生っ！」

いつの間にやら、桜川先生の後ろにはカルテらしき書類を持った川瀬先生が立っていた。

「叩く事ないじゃん！俺は冗談のつもりで」

「夏歌ちゃんにセクハラしてたように見えたけど？」

「違うって！マジで冗談のつもりで」

「こんにちは、夏歌ちゃん」

「こんにちは……」

「って、俺はスルー!？」

「悠くん、僕は夏歌ちゃんの診察をするから、後はよろしくね」

川瀬先生は持っていた書類を桜川先生に渡して、私に視線を向けて「診察室に入ろうか」と言った。

「今日は私服、だね」

診察室に入ってすぐ、先生は私の全身を見つめた。

可愛いとか言ってくれるかな？

「……ここに、座ろうか」

期待とは裏腹に、先生は何も言ってくれず、ユニットに座るよう促した。いつも通り、右横の椅子に座った先生は「さて」と言って世間話を始める、と思ったら。

「はあ……参ったなあ」

困ったように頭をかいた。

「あのさ、夏歌ちゃん、どんな服を着ようが、それは夏歌ちゃんの手当だと思っ。ただ、ここにそういうのを着てくるのは……やめてくれないかな？」

ええっ!!まさかのダメ出しですか!?

予想外の事態に、ショックが大きい。浮かれて、おしゃれしてきた自分が本当に馬鹿みたいに思えた。

「そんな丈の短いスカートだと、目のやり場に困る……」

え？目のやり場に困る??

確かに私が今日、着てるワンピースは丈が膝より10センチくらい上。持ってる服の中では、1番丈が短いと思う。

「うちはひざ掛けとか置いてないし、万が一、スカートが捲れたりでもしたら……ちょっと待ってて！」

そう言って、先生はどこかへ行ってしまった。

すぐに戻ってきて、「はい、これ」と言って私に薄い水色のパーカーを渡した。

「それ、僕の上着なんだけど、ひざ掛けの代わりに使って」

「えっ!!!」

これ、先生の?どうしよう、なんか少し興奮してきちゃった。

こんな展開はさすがに予想外だ。

「あ、ごめんね。嫌だったよね?こんなおっさんが着てたものなんか、触りたくないよね」

「いえっ、そんな事ないですっ!使わせていただきます……」

結果的に、これを着て来て正解だったかも。

今日の治療は、また根っこの消毒。

こないだと同じ個所をファイルでひたすらグリグリされた後、強烈な匂いの薬が詰められて根の消毒は終了。その後はまた小さい虫歯を1本治した。

これで今日は終わりかと思ったら「ついでにもう1本、治そうか」と言われた。

「小さいうちに治してしまいたいし、長く通院するのも嫌だよな？」

本当は嫌じゃないけど、私は何も言えなくて、「お願いします」とだけ言って、ただ大人しく治療を受けた。

治療の最中はずっと先生に貸してもらった上着をひざ掛けにしてたけど、治療とは別のドキドキに襲われたまま、妙にくすぐったい気分だった。

治療の後にご褒美のイチゴ飴をもらった。

次の予約はまた3日後の夕方。帰り際、先生は「もうそんな丈の短い服は着ちゃダメだよ？」と散々、念押しされた。

医院を出てすぐに、バックの中の携帯が鳴った。確認してみると、翔太先輩から「今何してるの？」といった内容のメール。それを見て、気持ちは一気に沈んで、無性に切なくなった。

キス未遂以来、会話をしてない。

ずっとこのままじゃ、さすがにダメだ……。

しかしその後も、結局私は先輩を避けてばかりいた。彩ちゃんからは「いい加減にダーリンと仲直りしなさいよ～」と言われてばかり。

そんな中で、私は ある事 に悩まされるようになった。

「こんにちは一、夏歌ちゃん」

「こんにちは」

診察台に座る私の顔を覗き込み、癒し効果抜群の笑顔を向けられた。同時に胸の奥や頬が熱くなっていく。

ああ、今日もだ。

今日もまた、先生を見たら火照りと胸の動悸に襲われた。先生の顔を見るたびに、いつも同じ症状を起さる。

「こないだ言った通り、今日は型取りをするね」

3日おきの通院を繰り返して、小さい虫歯の治療と根っこの消毒も完了して、後は型を取って被せ物をしたら左下の奥歯の治療は終わるらしい。

治療が着々と終わりに近づいてる事が、寂しくてたまらない。

通院してるうちに、先生ともだいぶ仲良くなれた。医院に行ったら世間話とかするのはもちろんの事、毎日少しメールのやり取りもしてる。

先生はだいぶメールを打つのに慣れたらしく、最近のメールはきちんと変換もされていて、可愛い絵文字まで添えてある。

私の心の中で、川瀬先生の存在は日に日に大きくなるばかり。悩みの種は先生という時、限定



で起きる火照りと動悸。そして、翔太先輩に対する申し訳なさど得体の知れない後ろめたさ。

「印象材っていう、ガムみたいなやつを口の中に入れるね。はい、あーん」

寝かされた状態になって、上から覗き込んできた先生に促されて口を開いた。

一瞬、視界にピンク色の塊が映った。

口の中いっぱいミントの香りが広がって、左下の奥歯に本当にガムに似た感触の物が力強く押しつけられた。

「んんっ!!」

「あ、動かないでね〜」

歯の型を取る印象材というものは、口の奥に押し込まれており、おまけに先生の人差し指と中指が印象材を押さえるために私の口の中に入ったまま。

息苦しさと、印象材の感触の気持ち悪さで顔を何度も動かしそうになった。

「んう……」

「ごめんなあ、苦しいよね？でも、なるべく動かないでね？上手く型が取れなかったら、やり直さないとダメだから」

先生は左手でしっかり私の顔を押しえた。

とにかく目を閉じて終わるのを待った。約3分後、印象材が外された。たった3分が、とても長く思えた。

「お疲れ様。今日もがんばったね」

マスクをしたまま目を細めて笑った先生は、手袋をしたままの手で頬を撫でてくれた。

寂しい事に、今日は型を取ったら終了。いつもに比べ、先生といられる時間が短い。体が起こされて、次回の治療内容を説明された。

「次なんだけど……1週間後にしてもらってもいいかな？それくらいで、被せ物ができるから」

次は少し間が空いちゃうな。1週間も先生に会えないんだ。

「で、通常だと神経の治療をした後はクラウンっていう銀色の歯全体を覆う物を装着するんだけど」

クラウン??銀色で歯全体を覆うって、どんなだろ？

先生は「待ってて」と言って席を外した後、すぐ戻ってきて、手に持っている物をトレイに置いた。それは奥歯の一部分だけの模型。4本歯が並ぶ中、一か所だけ全体が銀色の歯があった。

「通常はこれを被せるんだけど、これって目立つから正直、嫌でしょ？」

素直に頷いた。

すると先生は「って事で」と言って、人差し指を立てた。

「夏歌ちゃん、銀歯は1本もないし、治療は全部白い詰め物でしてるから、今回は特別にクラウンじゃなくてセラミックで治療してあげる」

これまた、何の事かさっぱりわからない。

「セラミックっていうのは陶器でできた白い詰め物なんだけど、クラウンより丈夫だし、見た目もいいから、どうかな？」

素人の私は、あまり話を理解できてなかったけど「はい」と頷いた。ここは、先生にお任せしよう。チンプンカンプンだし、この先生なら悪いようにはしないだろうし。

「じゃあ、決まりね。次回の治療は、1週間後の夕方だから、忘れずに来てね」

「はい」

「あ、それと」

先生はわざわざ私の耳元で「今夜も、メールするね」と言った。

吐息がぶつかったせいか、耳元で言われたせいか、先生の声は色っぽかった。体の隅々が熱を帯びていく。

「夏歌ちゃん、あいつにセクハラされなかったー？」

お会計の時、桜川先生はまたそう言った。最近ではこう言われるのがお決まりみたいになっている。そして私は決まって「されてませんよ」とドライに答える。

「正直さ、智が患者さんとこんな親しくしてんの初めてだよ？」

患者という単語に胸が痛んだ。

すっかり忘れかけていた。医者と患者という、川瀬先生と私の本来の関係。

「きっと、よっぽど夏歌ちゃんの事が気に入ってるんだね」

それは患者さんとしてか、1人の女性としての意味か。どっちの意味かは、さすがに怖くて聞けなかった。

「次は1週間後の夕方だね？んじゃ、お大事にー」

「はい」

「あ、そうだ！ねえ、夏歌ちゃん」

お会計を終えて帰ろうとしたら、呼び止められた。

意味深な笑顔を浮かべた桜川先生は小さめの声で、

「彼氏がないなら、智の事、狙っちゃったらー？あいついい年してまだ独身だし、恋愛経験も乏しいし、今が狙い目なんじゃないの？」

かなり意味あり気な事を言われた。

「付き合ってる人、いないんだよね？前に智がさ、嬉しそうにしながらそう言ってたから」

「そう、ですか……」

後ろめたい気持ちのせいか、桜川先生の顔がまともに見れず「ありがとうございました」と言い残して逃げるように医院を出た。

嘘をつくって、思ったより苦しいな。

心の中が先生の事でいっぱいになっていくにつれて、先輩との心の距離がどんどん遠くなっていくような気がした。

## 【曝け出せない胸の内】

---

「夏歌ちゃん、いつになったら仲直りするの？」

「えっ……」

人気のない体育館の裏で過ごすのが、すっかり日課となりつつある昼休み。彩ちゃんは紙パックのオレンジジュースを飲みながら少し心配そうな面持ちで、そう聞いてきた。

動揺して箸を落としそうになった。

「何で喧嘩したかは知らないけど、早く仲直りしないと、自然消滅しちゃうかもしれないよ？」

彩ちゃんは知らない。喧嘩したわけじゃなくて、キス未遂以来なんとなく気まずくなって避けてるだけだという事を。そして私が翔太先輩の事を……好きってわけじゃない事を。

彩ちゃんが放った自然消滅という単語を聞いて「いっそ、自然消滅してくれた方がいいかもしれない」と考える最低な自分がいた。

「あ、でも、自然消滅はないか～！だって先輩って、夏歌ちゃんにかなりメロメロだもん！」

私の本当の気持ちを知ったら、彩ちゃんはどう思うかな？

治療の日まではあと5日もある。ずっと3日おきに通っていたから、予約の日までが長く感じる。先生の顔が1週間も見れないのは非常に寂しい。

メールはしてるけど、メールじゃ顔が見れないし、声も聞けない。無論、治療が終わってしまえば先生とは滅多に会えなくなってしまうのだけだ。

気が付けば、また無意識のうちに川瀬先生の事を考えてばかり。

翔太先輩と会わないまま、迎えた放課後。

「ねえ、夏歌ちゃん。よかったら今日、カラオケ行かない？」

「えっ？」

「最近ずっと夏歌ちゃん、放課後になったらすぐ帰っちゃうじゃん？たまには気分転換しようよ！」

確かに最近はずっと真っ直ぐ家に帰ってるし、たまにはいいかな。私は「うん」と笑って頷いた。

彩ちゃんと遊ぶのも久々だし、今日は思い切り楽しんじゃおう。一応、お兄ちゃんに「彩ちゃんとカラオケに行くから」とメールを送った。

カラオケ店までの道中。彩ちゃんと何を歌うか話してる最中も、私はふと「先生はカラオケとか行くのかな？」と考えていた。

久々のカラオケで好きなアイドルの曲やハマってるアーティストの曲を2人で熱唱した。彩ちゃんと過ごす楽しい時間を満喫した。

すっかり盛り上がり、1時間延長して、カラオケ店を出た時には外は暗くなっていた。そして、お店を出た所には、

「夏歌、遅い」

「お兄ちゃんっ！」

何故か、お兄ちゃんがいた。スーツ姿なので、会社の帰りに寄った事は明確だった。

「迎えに来たんだよ。夏歌は可愛いから、誘拐されるんじゃないかって心配で心配で」

「雅人さん、お久しぶりでーす！ってか、シスコン過ぎて気持ち悪っ！」

「彩ちゃん……あんま夏歌を遅くまで連れ回さないようにね」

お兄ちゃんのシスコンぶりに、私はもう呆れるばかり。

しかも、途中の道で彩ちゃんと別れて2人きりになった途端、お兄ちゃんは「手、繋ごうか」と言って私の返事も聞かずに一方的に手を繋いできた。

「もうお兄ちゃん、恋人繋ぎはやめてよ」

「たまにはいいじゃん。そういえば、昔はよくこうやって手を繋いで散歩したよね」

言われてみれば、お兄ちゃんとこうして並んで歩くのは久しい気がする。小さい頃は、手を繋いで歩くのが当たり前だった。大きくなるにつれて、当たり前ではなくなったけど。

私達の両親が亡くなったのは、今から9年前。当時、私が8歳でお兄ちゃんが18歳だった。親戚がいなくて、両親を失った私達には2人で生きていくしか道はなかった。だからお兄ちゃんは進学を諦めて、私を養うために高校卒業後は会社に就職した。

まだ幼かった私は、お父さんとお母さんがいなくなったばかりの頃は泣いてばかりで、よくお兄ちゃんを困らせていた。でもお兄ちゃんは怒る事なく、私が泣き止むまですっとそばにいてくれた。

「夏歌？話、聞ってる？」

「え、あ、ごめん。聞いてなかった」

「もう、せっかく今日、会社であった面白い事を話してたのにー！」

「そんな事より、今日の夕飯どうする？」

「そっ、そんな事って」

しっかり手を繋いで、他愛もない話をしながら夜道を歩いて、家が見えてきた。その時、家の前に誰か立っているのが見えた。

暗いから、遠目ではわからなかったけど、近づいていくにつれて、家の前にいる人物が誰なのかははっきりとわかった。それは私がこの頃、意図的に避けている人。

「夏歌……」

「先輩っ……」

翔太先輩だった。

何で、先輩がうちに？

「キミは、夏歌の友達、かな？」

お兄ちゃんが困惑気味に尋ねると、翔太先輩は少し口角を上げて微笑み自己紹介を始めた。

「初めまして。夏歌さんと交際させていただいてる、相田翔太と申します」

「えっ!!!交際って事は、彼氏!?!」

「はい」

今の私にとって、逃げ出したくなるような状況だった。

こんな形でお兄ちゃんに彼氏がいる事がバレるなんて、翔太先輩がうちまで来るなんて、何もかもが想定外で、動揺して何も言葉が見つからない。

「彼氏がいたなんて、初耳なんだけど……とりあえず、立ち話もあれだから、上がってよ」

「いえ、お構いなく。少しだけ、夏歌さんと話したくて来ただけですから。あなたは、お兄さん、ですか？」

「う、うん。いつも妹がお世話になってます。じゃあ、俺は夕飯の準備してるから」

不安そうな顔の私に気づかないくらい動揺したお兄ちゃんは家の中に入ってしまい、先輩と2人で外に残された。

「夏歌」

一步、先輩が近づいてきた。私は咄嗟に走って逃げようとした。

「逃げようとするなよ……話したい。だから、逃げるな」

瞬時に腕を掴まれてしまい、あっさり阻止された。

私の手をぎゅーっと握り締めて、先輩は消え入りそうな切ない声を出した。胸が締め付けられる感覚に襲われ、無性に苦しくなった。

お願いですからそんな苦しそうな声、出さないでください。

「最近ずっと避けてるよな？メールも返事くれないし……夏歌、ごめん。あの日、いきなりキスしようとした事が原因だよな？」

何も言い返さなかった私を見て、先輩は凶星と受け取ったようでまた「ごめん」と言って、今度は頭を下げてきた。

「そ、そんな、謝らないでください」

「ちょっと、焦り過ぎたんだと思う。ほら、夏歌、俺といってもあんま楽しそうじゃないし、付き合ってるのに、全然恋人っぽくないし」

なるべく普通に振舞ってたつもりだったけど、先輩の目にはそんな風に見えてたんだ。一緒にいても緊張してるだけだって、見透かされてたの？

「夏歌」

名前を呼ばれた次の瞬間。先輩は掴んでいた私の腕を引っ張り、その弾みでバランスを崩した私は、そのまま先輩の胸にダイブする形となった。

そして更に、先輩は私の体に両腕を回して逃がさないようにしっかりと抱きしめた。

「頼むから避けないでほしい……メールも、あんま無視しないで。正直、避けられてる間、すごく寂しかったし……辛かった」

腕の中にいる私には、先輩がどんな顔をしてるかはわからなかった。ただ、いつも凜としてる先輩がこんな弱々しい話し方をするのは初めて。

のしかかる罪悪感の重圧に、息苦しさを覚えた。

「俺らはまだ付き合って2ヵ月くらいだし、焦らずに、ゆっくり関係を育んでいこう。もう、いきなりキスしようとしたりはしないから、安心して……もう絶対、焦らないから……」

真っ直ぐぶつかってこられると、余計に胸が痛くなる。

「……改めて聞くけど、俺の事、好き？」

素朴な質問にも、返答できなかった。好きです、と返せばいいだけの簡単な質問なのに、難問に感じられて答えが出せなかった。

「まさか、他に好きな奴いるとか？」

急に不機嫌になった先輩の声がしたので、無意識のうちに体をこわばらせた。

他に好きな人。その単語を聞いて、何故か頭に浮かんだのは、

『夏歌ちゃん』

優しく、ふわりと笑う川瀬先生だった。同時にかぁーっと顔が熱くなってきた。鼓動も自然と早くなってくる。

先生の事を思い出したただけなのに、何で？

「さっきから黙ってないで、何か言ったらどうなの？」

我に返り、恐る恐る顔を上げてみれば、目に飛び込んできたのは悲しそうな顔をしてる先輩。

「他に好きな人なんか、いるわけないですよ……」

結局、これだけ言うのに精一杯だった。先輩はちゃんと真っ直ぐぶつかってきてくれたのに、私は胸の奥にある本心をずっと押し込めたまま。

先輩は私の体を離し「そっか」とだけ言い残して、帰って行った。帰り際はちゃっかり、私の頭を撫でて更には耳元で「明日は、一緒に帰ろう」と言われた。

私、先輩と付き合わない方がよかったかもしれない。

リビングに入ると、キッチンの方から一定のリズムで包丁のトントンという音が聞こえてきた。

「あ、もう話は終わったの？」

スーツから私服に着替え、クマの模様がプリントされた可愛らしいエプロンをつけたお兄ちゃんは、包丁を置いて振り返った。

「うん」

「そっかそっか。夏歌、ちょーっと、兄ちゃんとも話そうか」

にっこり笑って、エプロンを外してお兄ちゃんはダイニングテーブルの前の椅子に腰を下ろした。私はその向かい側に座った。

「彼氏がいたなんて、初耳なんだけど」

いきなり本題に入っちゃうのね。

「ごめんなさい……照れくさかったから、隠してたの」

ああ、ダメだ。

お兄ちゃん目を真っ直ぐ見れない。

「そうか。でも、あの子、見たところ礼儀正しい好青年って感じの子だったよね」

隠してた事を責める風でもなく、むしろ翔太先輩の事を褒めてるように聞こえた。確かに翔太先輩は、いかにも好青年ですって見た目をしている。現に優等生で、先生達からの信頼も厚いので、優秀な好青年である事は間違いない。

「あの子は、同級生なの？」

「ううん、1つ年上の先輩。家は、洋菓子店をやってるんだよ」

「へーえ。まあ、夏歌は可愛いから彼氏くらい、いつかは絶対にできるだろうなって思ってたけど……ごめん、素直に祝福できそうにない。大事な人に恋人ができるって、嬉しいはずなんだけど、複雑で喜ぶのが難しいっていうか……」

ははっ、と笑った後、お兄ちゃんは片手でくしゃっと頭をかいた。

ため息をついて、

「でもま、あの子なら……夏歌を任せても、安心かな。俺の勘が正しければ、あの子についてれば将来は安泰だと思うよ」

「変な事を堂々と胸張って言わないでよ」

もっといろいろ言われるかな、と覚悟はしてたけど、お兄ちゃんは、意外にもあっさり私と翔太先輩との交際を認めたようです。

「さーて、ご飯にするかっ！」

「……」

認めてくれたけど、喜べなかった。家族の公認になったことで余計に複雑な気持ちになって、胸の中がモヤモヤした。

「へー、やっと仲直りしたんだー！よかったじゃーん！」

「う、うん」

翌日の放課後、翔太先輩と帰る約束をしてる事を伝えると彩ちゃんはとても喜んでた。

「いやー、2人が離婚の危機に陥った時はどうなる事かと思ったよ」

「離婚って……大袈裟な言い方しないでよ」

「だってさー、夏歌ちゃんと相田先輩ってすーっごくお似合いなんだもん！」

お似合い、か。

ズキン、と確かな胸の痛みを感じた。

「今日、授業中に数学の山田先生がさー」

久々に先輩と2人の帰り道。相変わらず、しゃべってばかりなのは先輩の方で私はほとんど相づちを打つだけ。

こんな雰囲気、楽しいのかな？私といっても、つまらないでしょう？

家まで送ってくれた先輩は帰り際、お店の売れ残り品だというクッキーをくれた。あいにく、歯の治療が終わるまで甘い物を控えようとしていたので、そのクッキーは食べずにお兄ちゃんにあげてしまった。

次の日も、そのまた次の日も、翔太先輩と2人での下校が続いた。そうしてる間に、予約の日

の前日になった。

「夏歌、明日も一緒に帰れるよね？」

この日も家まで送ってもらい、売れ残り品のお菓子をもらって、帰り際に先輩は当たり前のようにそう言った。

もちろん翌日の放課後は歯医者さんに行くので、私は「用事があるので無理です」と丁重に断った。でも先輩はそれじゃ納得してくれず、眉を寄せて「何で？」と怒ったように言った。

「どうしても、外せない用事がありまして……」

「その用事って何？言えない事なの？」

不機嫌そうに、私に詰め寄ってきた。

普段は優しいとはいえ、怒った時は妙に圧迫感があり、怖い。

「ごっ、ごめんなさいっ！本当に明日はダメでっ……」

必死に訴えると、さっきまで怒ってたはずの先輩は「わかった。いいよ」と言った。

胸を撫でおろして安心した。が、それも束の間。

「今度の日曜日、デートしよ。まだ俺ら、デートは3回しかした事ないし、今度の日曜、予定ある？」

「いえ、特に何も……」

予定は何もない。つまり、お断りする理由は何もない。こうして私は、日曜日に先輩とデートをする約束をしてしまった。



## 【近づく距離、離れる距離】

---

翌日、待ちに待った予約の日。おかげで朝からソワソワして、1日中ずっと落ち着かなかった。放課後になったらすぐに学校を出て、医院がある方へと足を進めた。

昨日の夜は川瀬先生から、

【明日、待ってるね】

と、クローバーの絵文字付きのメールがきた。

メールをくれるのは嬉しいけど、他の患者さんにもこういう事してるのかな？そう考えると、心境はとても複雑。

「いらっしゃーい！すこーしお久しぶりだねっ！」

到着して早々、桜川先生の賑やかな歓迎を受けた。高いテンションに苦笑いしつつ、保険証を出して「こんにちは」とあいさつした。

「ねえ、智に会えなくて寂しかったんじゃない？」

「ええっ？」

いきなり凶星をついてくるんだから、本当に油断ならない。鈍感そうに見えて、この人は意外と油断ならない人物かもしれないと痛感した。

どうなの？と迫る桜川先生に困り果てているところへ、救世主が参上。

「こらっ！夏歌ちゃんを困らせたならダメ！ほんっとに悠くんは油断も隙もないんだから」

颯爽と受付に現れた川瀬先生は、桜川先生の頭を華麗に叩いたのだった。そして私と目が合うと、いつものようにふわっと笑って「よく来たね」と言った。

「さ、中に入ろう」

「はい」

「えー！もっと俺に絡んでよー！」

「悠くん、ナンパしてる暇があったら仕事して」

「……はーい」

2人の緩いやり取りに心が和み、特に緊張感を抱く事もなく診察室へ。普段通り、お互いに少し世間話をした後、治療に入った。

「今日は被せ物をつけたら終わりね。でもその前に、一旦、口の中全体を診させてもらうね」

診察台が倒され、促されて口を開くと先生はミラーで念入りに私の口腔内全体を診た。ミラーが抜かれた後、先生は「新しい虫歯はできてないよ」と告げた。でもその表情はあまり穏やかではなかった。

「夏歌ちゃん、やっぱり奥の方があまり磨けてないから、後で歯磨きのやり方を徹底的に指導させてもらうよ？それと、まだ必要ないかもしれないけど念の為、歯周病の検査もしておこうか」

「えっ！検査って……な、何で」

「あくまで、念の為だからね？今から気を付けるに越した事はないんだから。どういう検査をするかは、後でちゃんと説明してあげるから。さ、始めよっか」

歯周病の検査って、どんな事するんだろう？痛いのかな？

一気に不安が押し寄せた。そんな中で治療が始まり、左下の奥歯に、生まれて初めてセラミックという物が被せられた。

「んんっ……」

歯がギュッとなるような、大きな違和感があった。

「高さは大丈夫？噛んでみて、違和感ある？」

あ、言われてみれば……ちょっと高いかも。

「少し、高いです」

「わかった。じゃ、調節するね」

先生が手にしたのは、タービン。いつものより先が太くて尖ってる気がする。

「待ってくださいっ！削るんですか!？」

「うん、そうだよ？もちろん削るのは被せ物の方だから、ぜーんぜん痛くないからね。はい、あーんして」

口を開けば、響き渡るタービンの嫌な音。確かに痛みはないものの、激しい振動に、いつ痛みがくるのかとビクビクしっぱなし。

「はい、これでどうかな？」

噛んでみると、まだ高かった。でも、ここで高いと言えればまた嫌な音を立てて削られてしまう。そう思うと怖くて「大丈夫です」と口走っていた。

先生は嘘だとすぐ見抜いたようで「まだ高いんでしょ？調節するから」と言われ、私は大人しく口を開けて目を固く閉じて耐えた。

「今度はどう？」

「あ、大丈夫です」

今度は本当に大丈夫だった。結構長く削られたけど。

「じゃあ、これで左下6番の治療は完了ね。残りは左上6番だね。そこは次回治療するから」  
とうとう残り1本になった。

ここに通り詰めるのも、もう少しなんだなあ。そう思った瞬間、感傷的な気持ちになった。

「じゃあ、次は歯周検査をやるね。見て、これはプローブっていうんだけど、これを使ってやるんだよ」

先生が見せてきたのは、先の鋭く尖った怖そうな器具。

「これを使って、歯と歯茎の間の歯周ポケットの深さを測るからね。痛くないと思うんだけど、もし痛かったら教えてね。始めて平気かな？」

あんな尖った器具を使うなんて、痛そうだな。

痛いのは嫌だし、まだ高校生という年齢でこういう検査を受ける事に羞恥と抵抗がある。黙る私を見かねたのか、先生がマスクを顎にずらして「夏歌ちゃん！」と明るい声で話し出した。

「こういう事はね、将来のためにも、今からちゃんとかアしておく事が大切なんだよ？初めて受ける検査だから不安になるのは仕方ないけど、とても大事な検査だから、少しでも一緒にがんばってみない？」

先生は絶対に卑怯な人だ。そんな優しい笑顔で、そんな風に言われたら、さすがに嫌とは言えない。小さな声で「はい」って言ったら、先生は「お利口さん」と言って頭を撫でてくれた。

「子供扱い、し過ぎですっ」

「ごめんごめん。可愛過ぎて、つい」

「えっ？今、なんて……」

「はい、倒すよ～」

聞き返そうとしたが、上手く誤魔化された。

「じゃあ、始めるよ。もしも痛むようなら、手あげて教えてね。はい、あーん」

経験した事のない検査で、不安を抱きつつ、観念して口を開けた。目を閉じて、無事に終わるのを心の中でひたすら祈った。

「んっ」

虫歯の治療みたいな痛みはないものの、時折チクツとした痛みが走る。耐えられない痛みではなかったため、辛抱した。

「はい、検査終了～」

どうにか乗り切り、診察台が起こされ、先生は「問題なしだよ」と可愛い笑顔を向けながら言ってくれた。

「検査、ちょっと痛かったかなあ？よく我慢したね」

「また子供扱いしてますね？あれくらいの痛みなら、平気です」

「そっかあ。夏歌ちゃんは痛みに強いんだね。じゃあ、治療が多少痛くても余裕で我慢できるんだね」

「強くないですっ！痛い治療なんかもう絶対受けたくないですもんっ！」

「ははっ、冗談だよ。でも、残念だけど、あともう1回だけ痛い思いさせる事になっちゃうな」

「左上の歯、治すの痛いんですか……？」

不安そうな私に対し先生は、眉を下げて「痛いよ」とオブラートに包まずにはっきり告げた。「ある程度、削ってある歯をまた更に削るんだから痛みは出て当たり前。麻酔をしても、痛いのは変わらないから、麻酔なしでやろうと思ってる。もちろん、この治療をするのは今日じゃなくて次回だけだね」

説明を聞いただけで、また不安が襲ってくる。縫りつくように先生を見たら、私の目を見ながら「ちゃんと最後まで、通えるよね？」と念押しのように言ってきた。

「それは……」

「信じてるから。夏歌ちゃんなら、絶対に最後まで通えるって。実は初回の治療で痛い思いさせたから、次回はもう来てくれないかもって思ってたんだ。だから、サボらずにちゃんと通ってきて、内心はホッとしてる。毎回、笑顔でここに来る夏歌ちゃんを見ると、いつもいつも嬉しい気持ちになって、疲れが全部吹っ飛ぶんだ。ほら、この年になるとさすがに疲れやすいから」

はっきり「痛い」と告げられた時は、先生の事を一瞬「鬼畜」と思った。

けど今は、ストレートに言われたおかげで顔が熱くてたまらず、ドキドキと暴れる心臓を静め

るのに必死です。

先生は平然とした顔をして「さ、次の作業に入ろうか〜」と何やら準備を始めた。これが、大人の余裕ってやつ？

「夏歌ちゃん、次は歯磨きの指導を徹底的にやらせてもらうよ！はい、これ」

渡されたのは適量の歯磨き粉がついたピンクの歯ブラシ。

「まずは、夏歌ちゃんが普段どんな風に歯磨きしてるか知りたいから、いつも通りに磨いてくれる？」

「先生が見てる前で、歯磨きしろって事ですか……？」

先生はキョトンとして「そうだけど」と言った。

「あ、恥ずかしがる必要はないからね？あんま身構えないで気楽に、ね！」

恥ずかしがらない方が無理。

歯ブラシを持って戸惑う私を、先生はジッと見てる。急かさずに、私がやり始めるのを待ってる。やるしかない、と覚悟を決めて羞恥を堪えて歯磨きを開始した。

ジッと見つめられている。そう思うと、体中が熱くなって、落ち着かなかった。

「せ、先生、終わりました……」

終わった時には、茹でダコになってるんじゃないかってくらい顔は火照っていた。歯ブラシを先生に返して、ひとまず口を濯いだ。

「夏歌ちゃん、いつもそういう磨き方してるの？歯を磨くスピードが、速過ぎるよ。もっとゆっくり丁寧にやらないと」

違いますよ、普段はもう少しゆっくり磨いてますよ。先生があまりにもジーツと見るもんだから、緊張しちゃって無意識のうちに早く終わらそうとしただけですよ？

「ちょっと、倒すよ。はい、あーんして」

寝かされて早々に開口を促され、口を開けると先生はいつになく真剣な顔でミラーを使って念入りに口の中を観察し始めた。

「やっぱ、奥の方があまり磨けてないね。奥歯はブラシが届きにくいから、辛抱強く丁寧にやらないとダメだよ？全体的に磨き残しが多いかなあ」

いくら大事な体の一部を守るためとはいえ、こういう指摘をされると、いたたまれない気持ちになる。

私の様子から何かを察したのか、先生は慌てて口からミラーを抜いて、

「ごめんね夏歌ちゃん！言い方が、キツかったね。もっと、優しく言えるように、気を付けるね……」

申し訳なさそうに謝ってきた。

決して、先生が悪いわけじゃないのに。言い方だって、キツイとは思わなかった。

その後は先生から徹底的な歯磨き指導を受けた。歯ブラシの持ち方や正しい磨き方など、先生はとても優しく教えてくれた。

こうして、ようやくこの日の治療は無事に終了したのだった。

診察室から出ると、受付にいる桜川先生が「お疲れー」と声をかけてきた。

次回の治療は月曜日の夕方。

前日の日曜日には翔太先輩とのデートが控えている。

(デート、気が重いな……歯の治療だって、もうすぐ終わっちゃうし……)

治療が終わったら、先生に会えなくなっちゃう。そう考えると、寂しさと切なさで胸が押し潰されてしまいそうになった。

「夏歌、はい、プレゼント」

「えっ!？」

デート前日の土曜日。お兄ちゃんは仕事から帰ってくるなり、笑顔で紙袋を差し出してきた。中身は、薄い水色の丈が少し長めのワンピース。

「明日のデート、それ着て行きなよ。髪の毛は、ポニーテールにしようか」

「いいよ……そこまでしてくれなくても」

「何言ってるの! せっかくのデートなんだから、おしゃれして、楽しんでおいでよ」

お兄ちゃんの好意は素直に喜べなかった。複雑な気持ちが募っていく一方だった。

あっという間に迎えた、デート当日。

早速、プレゼントしてくれたワンピースを着て、髪の毛はポニーテールにして、水玉模様のシュシュまで着けてもらった。

行ってきますと、お兄ちゃんに小さく手を振って家を出て、待ち合わせの場所へと向かった。

待ち合わせ場所に行くと、先輩はもう既に来ていて、スマホをいじっていた。

視線に気づいたのか、先輩が顔を上げてこっちを見た。

「夏歌」

微笑んで、小さく手を振りながらこっちに歩いてくる。

「先輩っ、待たせて、すみませんっ!」

「ううん。今来たところだよ。行こうか」

絶対、今来たところじゃないよね?

おまけに「行こうか」って言いながら、さり気なく手を握ってきた。

先輩は確実にモテるタイプだ。きっと先輩の彼女になりたい女の子はたくさんいる。だから彼女は、私じゃなくてもいいはずなのに。

「その服、可愛いね」

「えっ!? あ、ありがとうございます」

「そういう清楚系の服、夏歌によく似合ってる。あと、髪型も今日はいつもと違うね」

「お兄ちゃんが、結んでくれたんです……」

「ポニーテールも、似合ってる」

「っ……」

その後も他愛もない話をして、到着したのは大型のショッピングモール。日曜日なので人がたくさんいて混雑してた。

「迷子にならないように俺の手、しっかり握っててね？」

「私は小さな子じゃないですよ」

「ははっ。冗談冗談」

手を繋いだまま、ひとまずいろんなお店を見て回った。

先輩は私から片時も離れずに、ピッタリくっついたまま。だから私はずっと緊張したままで、落ち着かない。

やっぱり、先輩とのデートは苦手だな……。

「わっ、あの人カッコイイ！」

「本当だ！すごいイケメン」

雑貨屋さんにいる時、近くにいた2人組みの女の子が先輩を見ながらそんな会話をしていた。そして、チラッと私の方を見て、

「一緒にいるの彼女？」

「みたいだね……しかも、すごくお似合いじゃん」

と、言ってた。

私達って傍から見たら、そんなにお似合いなの？そんな風に言われても私、嬉しいなんて全く思えない。

「……夏歌、疲れた？」

「えっ？いえ、そんな事は……」

顔を覗き込まれて、咄嗟に顔を逸らしてしまった。

「どうして、露骨に顔逸らすの？それに夏歌、さっきから愛想笑いばかりで楽しそうじゃないし」

明らかに機嫌が悪くなってる。私達の間には怪しい雲行きが漂い始めた。

「あれ、歌ちゃん……？」

不穏な空気を打開するようなタイミングで、声をかけられた。

この穏やかな声と口調は、間違いない。

「あ、やっぱり夏歌ちゃんだ。偶然だね」

「先生……」

川瀬先生だった。

不運な偶然だと思った。デートしてるとこなんて、見られたくなかったのに。

「今日は髪の毛、結んでるね。この髪型、馬のしっぽみたいで可愛い～」

うーん、複雑な褒め方だけど、先生らしいからいいか。

「夏歌、この人誰？」

隣にいる先輩が露骨に不機嫌な声を出した。そして先生もようやく先輩の存在に気付いたようで、不思議そうに首を傾げている。

「あのっ、それはっ……」

「夏歌の彼氏です」

私の言葉を遮り、先輩は冷静に力強くそう言った。

「え……彼氏……？」

案の定、先生は啞然としていた。

変に思って当たり前だ。彼氏がいなくて先生に嘘をついたんだから。こんな形でバレるなら、最初から嘘なんて、つくんじゃなかった。

「夏歌とは同じ学校に通っています。学年は俺の方が1つ上ですが、仲良くお付き合いさせてもらってます」

離さないと言ってるように、先輩は繋いだ手の力を更に強めた。先生の視線は繋がれた手に向けられている。

「ところで、あなたは夏歌と知り合いみたいですけど……親戚の方ですか？」

「違うよ。親戚じゃない」

普段は優しくて穏やかな川瀬先生の口調は、刺々しさがあつた。

「僕は、夏歌ちゃんの担当医だよ」

そう言って先生は、にっこり笑って私の翔太先輩の間に割って入って、繋がれていた手を強引に引き離した。

さっきまで先輩と繋がれていた手を、先生はキュッと握った。重たくなっていた気持ちは一気に吹き飛んで、頬が熱を帯びていく。

「夏歌ちゃん、少し走れる？」

「え？は、はい」

耳元でそう聞かれ、意味もわからず返事をした。すると次の瞬間、先生は私の手を引いて走り出した。急だったので、ついて行くのに必死で先輩の事を気にかける余裕はなかった。

人の多いショッピングモール内をしばらく走って、さっきいた雑貨屋さんからだいぶ離れたところで先生は走るのを止めた。

お互いに息を切らし、先生なんて汗をかいてた。

「はあ……はあ……先生、大丈夫ですか？」

「う、うん……はあ……はあ……やっぱ、この年になると、走るのしんどい……」

「とりあえず、座りましょうか」

先生の手を引いて、エスカレーターの横に設置されているベンチへと移動して、2人並んで腰を下ろした。

カバンの中に入れてあるスマホがずっと鳴りっぱなしな事に気づいて、先輩に連絡しなきゃと思った瞬間、また気持ちが重たくなった。

「……ごめんね、夏歌ちゃん。勝手な事して」

「えっ、いえ！そんな事は……」

スマホに届く先輩からのメールを怖くて確認できない私に、先生は申し訳なさそうに謝ってきた。

でも本当は、あの場から連れ出してくれて、すごく安心してるんだ。

「気のせいかもしれないけど、すごく嫌そうに見えたから。夏歌ちゃん、あの人といえるの、すごく苦しそうだった」

周りの人はみんな、私と先輩の事を「お似合いのカップルだ」って言うのに。先生の目には、そんな風に見えてたんだ。親友に彩ちゃんにも、そんな事、言われた経験ないのに。

先生は、ちゃんと本当の私を見てくれたんだ。

「……先生、ありがとう」

「ううん。じゃあ今は、彼の事は少し、考えないようにしようか。携帯の電源は切っておきな」  
言われた通り、スマホの電源を切って、カバンの奥に入れた。



## 【誤魔化せない想い】

---

「ところで、今日の夏歌ちゃん、本当に大人っぽいね～」

嘘をついた私に、聞きたい事とかいろいろあるはずなのに。先生は気を遣っているのか、普段と変わらず呑気だった。

私が自分から言うまで、無理には聞かないでくれてるのかな？

「先生、ごめんなさい。私、嘘を……」

「嘘をつかれた事に関しては、別に怒ってないよ。ただ、夏歌ちゃんはその彼の事、本当に好きなの？」

フルフルと首を横に振った。

決して嫌いではないけど、恋愛対象として好きではない。

「好きじゃないのに、付き合ってるの？」

「私、今まで恋愛とかした事なくて……高校生にもなって、恋愛がどんなものか全然わからなくて、そのせいで同級生達の恋の話とかも、ついていけないし……その矢先に、彼に告白されて……先輩の事は尊敬してたし、付き合えば恋愛がどんなものかわかると思って……断る理由だって、特になかったですしね」

口に出して、改めて述べてみると実に最低な動機だと痛感する。結果として、翔太先輩を傷つけているのだから。

「要するに、恋愛を経験してみたかったってだけか。若気の至りってやつだね」

責める風でも、軽蔑する風でもない先生の話し方。いつもと変わらない雰囲気、安心する。

「恋愛ってね、焦ってするもんじゃないよ。焦ってもただ、苦しいだけでしょ？」

「……はい」

「自分の気持ちを偽るのは、もう止めにしよう？恋愛において、まず大切なのは、自分自身の正直な気持ちを隠さない事だよ」

本当に、そうだと思う。

憧れの人ではあるけど、どんなに努力したって恋愛対象として見る事ができない。一緒にいても落ち着かなくて、周りからは勝手に公認カップル扱いされて……。

苦しい事ばかりだった。

「夏歌ちゃん、改めて聞くけど、これからもあの子との恋人関係を続けていくつもりなの？」

「……いえ」

先輩には悪いけど、恋人関係をこれから先も続けていくつもりはない。

このまま付き合っても、きっと苦しいだけ。先輩をもっと傷つけてしまうかもしれない。

傷が大きく広がってしまわないうちに、けじめをつけてしまった方がいいんだ。好きになるかと思ってダラダラ恋人を続けても、私が先輩を恋愛対象として見る事はないだろう。

だって、私は……。

「そっか。僕が言うのもアレだけど、そういう事は早い方がいいと思うよ？それに、恋愛はきちんと白黒つけないと、後でトラブルになりかねないからね」

トラブル……。

それを聞いて、心と怖くなった。

先輩はモテる。当然、ファンはたくさんいる。もし、私が好きでもないのに先輩と付き合ってたって知られたら……考えただけでゾツとした。

「夏歌ちゃん、大丈夫？具合、悪いの？」

「いえっ、平気です」

「……大きなお世話かもしれないけど、あの彼と話をする時、僕も立ち会おうか？」

「大丈夫ですっ！それくらいは、ちゃんと1人でできます……」

「わかった。もし、何か困った事になったら相談してね？どんな話でも聞くし、絶対に力になるから」

「ありがとうございます……」

先生、心配してくれてるんだ。

でもこれは自分の事だから。甘えるわけにはいかない。

小さい子供じゃないんだから、これくらいは自分の力でどうにかしないとね。

「ところで夏歌ちゃん、これからどうする？」

「え、これから、ですか？」

先輩とのデートは中断って形になったわけで……私がこれ以上、ここにいる理由もなくなって、先生だってきっと何か用事があるってここにいるんだろうから……。

「私、帰ります！先生、本当にすみません！嘘ついたり……なんか、いろいろと……」

ああ、もう。

一度にいろいろ起きたせいで、まだ少し頭の中が混乱してるのかな？

「え、夏歌ちゃん、もう帰っちゃうの？」

「へっ？」

口ごもる私を、先生は眉を下げて少し寂しそうな視線を送ってきた。

「別に僕、忙しくないよ？ここには、ちょっとお買い物に来ただけ。……せっかくだから、お買い物に付き合ってくれないかな？」

「ええっ!？」

ちょっと待って！

この展開は、かなり予想外過ぎる！

買い物に付き合うって、それじゃまるで……。

「……嫌？」

「嫌じゃない、です……でも」

「じゃ、決まり。って言っても、あの彼、夏歌ちゃんの事を探してるかもしれないから、バツタリ鉢合わせしちゃうかもなあ……」

翔太先輩、ごめんなさい。

不謹慎だけど私、今すごくドキドキしてます。胸の重たさも憂鬱も自然と全部なくなって、胸が軽くなってる。

「よし、あの子と鉢合わせしないように、注意しながらお買い物しょっか」

「.....私、最低ですよ」

「.....？」

「先輩といた時は胸が重たかったのに、今は気持ちが軽くて.....むしろ、先生に偶然会ってビックリしたけど、よかったって思ってるんです.....」

すぐ隣にいる先生が、今、どんな表情をしてるかなんて、怖くて見れなかった。膝の上のカバンをギュッと抱きしめて、視線は下に向けたまま。

最低どころじゃない。

多分、私は誰よりも冷血な奴なんだ。

「最低なのは.....僕だよ」

「えっ？」

かろうじて聞き取れた、消え入りそうな小さな声。あまりにも寂しそうな言い方に、慌てて先生の方を見た。

先生は少しだけ悲しそうな顔をしてたけど、目が合ったら小さくニコッと微笑んだ。

「あの子に対して、大人げない事をしたなって.....はは、本当に僕、ダメな大人だ」

ズキンと胸が痛む。

予想外の連続で、何に対して胸が痛むのかは、もうよくわからない。

「夏歌ちゃんは、こんなダメな大人になったらダメだよ？さ、行こうか」

先生は全然、ダメな大人なんかじゃないですよ？と、心の中で秘かに呟いた。

先輩に見つからないように周りを注意しながら歩いて、着いたのは可愛い小物やぬいぐるみが置いてあるファンシーなお店。

お店の中にいるお客さんも、女の子ばかり。

そういえば先生、何を買いに来たんだろう？まさか、彼女へのプレゼントを買いに来たとか!?あれ、でも先生って彼女いないんじゃないかったっけ？

悶々と考え込んでいる私とは裏腹に、先生は「これ可愛い～」と言って棚に並んだクマのぬいぐるみを1つ手に取った。

「夏歌ちゃん！このクマちゃん、可愛くない？待合室に置くのに丁度いいかも」

「確かに可愛いですけど.....ぬいぐるみを買いに来たんですか？」

「うん。待合室にぬいぐるみをたくさん置いて、和んでもらいたいなあって」

そういえば、あの歯医者さんの待合室にはクマやうさぎのぬいぐるみが結構置いてあるけど...  
...まだ置くつもりなの？

「本当は、悠くんぬいぐるみ選ぶの手伝ってもらおうと思ったんだけど、男2人で買い物はむさ苦しいからヤダって断られちゃったんだ～」

なんだ.....ぬいぐるみを買いに来ただけだったんだ。

安心したのも束の間。次第に不安な気持ちがまた押し寄せてくる。

「ねえ、どれがいいと思う？どれも可愛くて、すっごく迷って困るなあ～」

先生って彼女いるんだっけ？

桜川先生の情報によると、独身で恋愛経験は乏しいらしいけど。本人から直接聞いたわけじゃないから、本当かどうかは定かじゃない。

彼氏いるのか聞かれた時に、私も思い切って聞いてみればよかったのに。「彼女いるんですか？」って……。さり気なく聞いちゃえばいいのに、できないって心が叫んでる。

怖いんだ。

単に桜川先生が知らなかっただけで、本当は付き合ってる彼女がいたら……。その事実をどうやって受け止めればいいのか……。怖くてたまらない。

グルグル考えてるうちに、あっさり買い物は終わってしまった。

「さてと、夏歌ちゃんはどこか見たいお店とかある？」

「見たいところは……。特には」

目当ての物は買ったみたいだし、これでもうバイバイか。

てっきり、これでもう帰るんだと思っていたが、

「じゃあ、適当にブラブラしようか」

そう言って先生は「行こ」と私の手を引いて人ごみの中を歩き始めた。

「はぐれたら困るから、しっかり手繋いでようね」

「っ……」

これって、デートみたい。

一瞬、脳裏に過ったのはそんなおめでたい解釈の言葉。でも実際はデートじゃない。それに、年齢が離れている私達は周囲の人達にはどういう風に映ってるんだろう。

「あ、先生、クレープ食べません？」

しばらく歩いて、偶然クレープ屋さんを見つけたので、そう提案してみた。

「ええっ！あれって、甘いよね？うーん、治療が終わるまで甘い物はなあ……。そもそも、夏歌ちゃんは歯質があまり丈夫じゃないんだから、油断してるとすぐに新しい虫歯ができちゃうからね？あ、そういえば、歯磨きはこないだ教えたやり方でやってる？」

どうして話がこんな方向に？

「ちゃんと歯磨きできてるか確認したいんだけど、今してもいいかな？」

「いえいえっ！ここ、病院じゃないんですよ!?今は絶対にしないでくださいっ！」

もちろん全力で拒否。

大衆の面前で、そんな恥ずかしい事ができるわけない！ある意味、羞恥プレイじゃないですか!?

この人は、深刻な職業病なのかな？

「先生って休みの日でも歯医者さんモードが抜けないんですね」

「ごめんごめん。きっと職業病だね～」

あ、自覚あるんだ。

「それはそうと、甘い物を食べるの、今は我慢しておこうね？」

先生の人差し指の先が、唇に触れた。かと思えば、今度は左の頬が指でトントンと軽く叩か

れた。

いつもと変わらず穏やかに笑みを浮かべて、顔を近づけて私の耳元で、  
「まだ1本、虫歯が残ってるからね。もうひとがんばりしたら、甘い物は一旦解禁ね」  
小さな声で宣告された。

体の底から熱くなって、全身が支配されていくみたいで、ソワソワして落ち着かない。緊張とか居心地が悪いとか、そんなんじゃない……。

先生といると、私の感情はいろいろな方向に左右してばかりだ。

「ただいま……」

フワフワした気分のまま帰宅。

「お帰り。楽しかった？」

出迎えてくれたお兄ちゃんの顔をまともに見れずに、「うん」と短い返答をした。お兄ちゃんは私が先輩と一緒にいたって信じ込んでる。

さっきまで一緒にいたのは、川瀬先生だけだ。

わざわざ家まで送ってくれて、帰っていく先生の背中を未練がましく見つめていた。

「そっか、楽しかったんならよかった」

お兄ちゃん、私は悪い子です。

彼氏とのデートを中断して、彼氏じゃない人とデートしたんだから。正しくは、ただショッピングしただけだけど。

……私、やっぱ誤魔化せない。

自分自身の本当の気持ちに嘘をつき続けるのはよくない。目を逸らしたくない、もう素直に認めてしまおう。

私……川瀬先生の事が、好きなんだ。

恋愛は焦って無理にするものじゃない。ゆっくりと、自然にしていくものなんだ。

もちろん世の中には一目惚れとか、いろんな恋の形がある。私の場合は徐々に先生に惹かれて、自然と恋になってたんだ。

年齢とか、関係なく。

自分より20歳も年上の人、それでも好きなんだ。

自室で恐る恐るスマホの電源を入れてみると、予想してた通り、先輩からメールと着信がたくさんきていた。

メールは怖くて確認できなかった。

きっと先輩は明日の朝、迎えにくる……。

「白黒、つけなきゃ……」

怖いけど、逃げてたら何も解決できない。ぶつけなきゃ。本当の気持ちと、自分がどうしたい

かを……。先輩ならきっと聞いてくれる。

ちゃんと言おう。

たとえ、どんな結果になったとしても。

「がんばって向き合わないと……。恋愛で大切なのは、自分の正直な気持ち……」

吐き出した自分の声は思いのほか震えている。

今は意気込んでいても、いざとなれば向き合う勇氣はなくなるかもしれない。私は自分を奮い立たせるように、さっき先生がくれたうさぎのストラップを手の中で優しく握り締めた。

家まで送ってくれたその帰り際に、先生がくれたんだ。

『はい、一応これ、今日の記念に。僕はあの彼に対して大人げない事をしたけど、でも今日、夏歌ちゃんと買い物できて楽しかった』

『先生……』

『じゃあ、また明日ね。待ってるから、必ず来てね』

私も先生と同じ。

朝はあんなに憂鬱で沈んでたのに、今はこんなにも心が温かくなって、ドキドキした気持ちが止まらない。

今日、すごく楽しくて、夢みたいだった。まるで先生とデートしてるような、ほんのひと時でもそんな気分になれた。

ま、先生はデートだなんて、きっと微塵も思っていないだろうけど。

「先生……好き」

いつかこの想いを、伝えられる日が来たらいいな。

実のならない可能性しかない恋だけど、それでもこれが私の正直な気持ちだから。